

[公開講演]

アメリカニズムと反アメリカニズム

——ヨーロッパの立場——

マッシモ・フィニ

1931年3月、アメリカでの短期滞在から帰国したフランスの学者ポール・アザールはこのように述べた。「パリに帰ったら、アメリカを批判することが流行になっていることに気がついた。3-4年前には、アメリカを並外れて賞賛することが流行であったのに」と¹⁾。

その時点までは、アメリカン・ドリームに対して懐疑を感じる者は存在しなかった。それは『若いアメリカ』の夢であった。自由、平等、容易に得られる仕事と金、『機会均等』、自己の実現、全員にある成功の可能性、浸透した福祉、快適な日常生活、すべての家庭にあるバス・ルームと家電製品、全国民が保有する自動車、技術の奇跡という神話的楽土であった。そしてこの神話の象徴は摩天楼であった。それらは、それらがまだ存在していなかった『古いヨーロッパ』の人々の連帯的想像力に大きなインパクトを与えたものであった。アメリカン・ドリームを追求して、ヨーロッパから、とりわけイタリアとアイルランドから、何十万人、何百万人と移動して来た移民たちは、この夢の魅力の証人であった。

1930年代初頭、この夢、この神話には翳りが現れてきた。理由は根本的に二つあった。その一つは偶発的なもので、1929年の大恐慌である。ほとんどすべてを経済に賭けてきただけに、まさにその分野で失敗したと見えたことが、アメリカにとっては特に気がかりであった。もう一つは、より深層にかかわるもので、十九世紀後半にフリードリヒ・ニーチェが先駆的に提示した『危機の文化』である。それは、第一次世界大戦の衝撃と、そこに技術の二重性が暴露された結果、ヨーロッパで急速に広がりつつあった。まさに新しい技術によって開発された武器の破壊的能力の結果、あの戦争は、史上かつて例のない大虐殺となったからである。この文化は、超ベスト・セラーとなったオスワルト・シュペングラーの『西洋の没落』(1918-1922)に基準点を見出だした。シュペングラーがヘラクレイトスを出発点にしたのは無意味ではなかった。ヘシオドスと同じように、ヘラクレイトスは歴史の進展について悲観的で、人類の運命が永久に衰退するものであると見ていた。

進歩や近代性に対する信頼の危機であり、ひいてはその進歩や近代性をより顕著的に、大々的に具現化したアメリカの危機でもった。

¹⁾ Paul Hazard, *Un collège de jeunes filles en Amérique*, Paris, 1931, p. 110.

ヨハン・ホイジンガが第一次世界大戦のあと、『進歩』という文言が哲学者・歴史家・一般の人々の口からいかに早く消え去ってしまったかを指摘しているのに対し²⁾、1929年の大恐慌も楽観主義に傷をつけなかったアメリカでは、進歩と近代化は社会の頂点と不動の北極星として残っていた。

そしてこの時点、1930年代初頭に、反アメリカニズムというものが初めて出現した。しかし、それは政治的なものではなかった。欧州大戦への参戦の結果、アメリカが欧州の問題に対して発言権を獲得して以来、合衆国の政策に対する批判は、実際には非常に軽いもので、14条提案のウィルソン主義や、人道主義的民主主義や、アメリカ式の平和主義（この時からどんなにアメリカは変身したことか!）に対するものであった。そして、反アメリカニズムは、ヨーロッパでのファシズムの台頭の所産でもなかった。その後、そのようになったとはいえ、反アメリカニズムが出現したときにはヒトラーはまだ政権を掌握しておらず（それは1933年のことである）、イタリアのファシズムはアメリカに対して曖昧な姿勢を示していた。民主主義国家として、とりわけ最初で最大の民主主義国家として、確かにアメリカは潜在的な敵であったが、しかし、『若い国民』の国であったし、その視点からは、ムッソリーニ政権がその革命の結果、一新して再生し、復活させたと考えていたイタリアの国民に近かった。なお、ファシズムは『新しい芸術』とされていた映画に対して強い関心を抱き、そして映画は、摩天楼とともにアメリカの象徴となった。ムッソリーニの長男、ヴィットーリオは「観衆はいまやアメリカ映画を愛している」と指摘し、ドイツ映画の重苦しさや、フランス映画の古めかしさと軽薄さを考えると、それを愛するのが当然だと判断した。そして、次のように述べている。「アメリカは若く、ヨーロッパはあまりにも古い。このような事情は、単なるエンターテインメントの分野であってもそれぞれの観衆を左右する。（中略）アメリカの観衆は幼稚で楽しい冒険の感覚によって惹かれている。この若さは、幾世紀にもわたる、歴史と文化や哲学の体系や法則の蓄積の欠如の結果であるとしても、ヨーロッパの多くの国の、もう存在しなくなった若い世代よりも、我々の果敢なる世代に近いものである³⁾」と。そして、ヨーロッパ映画の保守的な性格に対して、アメリカ映画の永続的、革新的な性格を対置することで文章を締めくくった。

したがって、初期の反アメリカニズム、1930年代の曙に芽生えてきた反アメリカニズムは、ファシズムから派生するものではなく、フランスからドイツまで、イギリスからフランスまでの全ヨーロッパの共通の感情であり、アメリカの政治ではなく、アメリカの生活様式、アメリカの価値観という『アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ』を対象にしたものである。

この時、アメリカに対して非難されたものは、まさに数年前までは賞賛されていたものであった。何でも標準化・均一化する徹底的な技術の支配（それはときに『機械主義』と呼ばれていた）、豪奢として評された快適さや、手段を問わずに追求される成功や、容易な金銭や、単に物質的な側面から

²⁾ Johan Huizinga, *La Crisi della Civiltà*, Torino, 1962, p. 4.

³⁾ Vittorio Mussolini, *Emancipazione del cinema italiano*, in "Cinema", 25/9/1936, p. 213.

理解される進歩や、狂氣的、かつ執念深い行動主義や、人間に優先する経済や、すべての伝統からの乖離や、価値観の欠如である。

かつてはほぼ無条件的にアメリカを賞賛していたヨーロッパは、今やアメリカ化される危険を感じるようになった。この危険はすでに現実的となっていた。アメリカ化とは近代化を意味することであり、近代性に抵抗することは不可能であるからである。アメリカ化＝近代性の進展と対面させられたヨーロッパは、自己の文化・伝統・生活様式・価値観、自己の魂を失わないように、独自のアイデンティティーを再定義しようとする。ヨーロッパはまだアメリカ合衆国と同一のものであると感じていない、あるいは少なくともそう感じたくはなかった。啓蒙運動と産業革命をもって、ヨーロッパの文化と歴史が提示した一部の前提を、極端的な結果まで推し進めたアメリカは、落ちぶれた子供としてみなされるようになった。一義的で、すべてを抱合する西洋の概念はいまだ存在せず、アメリカは『極西』として、ヨーロッパとは異質なものとされていた。

そして、増え続けるアメリカ文化の影響や、大西洋の向こうの生活様式へのヨーロッパ人の順応が懸念された。かつては人々を魅了し、その技術的な優越性のためにヨーロッパの市場を侵略したハリウッド映画も、アメリカの価値観のための恐ろしい宣伝武器、その進展に抵抗することの出来ない植民地化の効率的な手段として感じられるようになる。この時代のイタリアの著名な知識人であったレオ・ロンガネージによると、「アメリカの映画は技術に過ぎず」⁴⁾、技術力を通じて、古いヨーロッパに軽率さや、幼稚さや、質の悪さや、ヨーロッパ文化の特質だった生の悲劇の感覚を否定する『ハッピー・エンド』の要因を持ち込んでいる。映画においても技術はメリットというよりも欠点となる。そして、映画を通じてアメリカの象徴である大衆文化も批判される。あの『戦艦ポチョムキン』のようなソ連映画をまじだとするまでだった。これもプロパガンダ手段であったのだが、アメリカのそれと違って空虚なものではなく、「逆に観客をより知的に、より思慮深く、より批評的にする」ものと見做されていた。これは1934年にイタリアの評論家、コラード・ソフィアが述べた評価であるが⁵⁾、それは当時のヨーロッパのインテリ・エリートが共鳴できるものであった。そしてそれは今や、反民主的な全体主義政権の進展によってはぐくまれた意見でもあった。

そして、過去を有しないアメリカと違って、文化・伝統・過去を否定しない近代化のモデルの可能性が模索された。

日本も注目される。アメリカと同じように、日本も両義的に評価された。一方は今や現実味を帯びるようになっていた『黄禍論』である。ヨーロッパ人と西洋人の悪夢にはいつも黄禍論があり、現在のそれは中国である。日本は西洋が提出する技術と経営モデルを奪い取り、それらを模倣し、改善し、完成して、我らの市場を侵略する。反面、表面的なアメリカ化と近代化の下に、ほとんど原始的とい

⁴⁾ Leo Longanesi, *L'Italiano*, Numero Speciale, January/February 1933.

⁵⁾ Corrado Sofia, *Il cinematografo affare di Stato*, in "Critica Fascista", 1/4/1934, p. 39.

える古い昔の伝統や、強い社会秩序や、サムライの規律を守っていた。これらが1930年代のヨーロッパの観点から見た日本であった。もしヨーロッパがアメリカ化せず、つまり伝統・過去・自己自身を否定しないで近代化を目指すとするならば、日本は模倣すべきモデルとなる。

戦争が近づくとつれ、ヨーロッパでの反アメリカニズムはより辛辣となり、その旗手は、言うまでもなくファシズムの独裁諸国であった。アメリカは標準化と均一化や、軽薄さや質の低級さの国だけではなく、人種差別によって虚構化された形式的な平等の裏腹に著しい社会の格差を持ち、富豪と億万長者の一握りの周りに貧窮が大海の如くひろがり、労働者の権利が保護されていない、民主制度が大企業の莫大なビジネスを正当化するための見せかけに過ぎない国となる。さらには、暴力、ギャング、窃盗団の国でもある。

アメリカの神話は、第二次世界大戦での勝利の結果、再び頂点に戻った。しかしナチスの蛮行から旧大陸を救出したことで、アメリカ人は凱旋の栄光を浴びていたにもかかわらず、その文化の浸透には苦戦したのである。1950年代に、アメリカからイタリアにキッチュなものが入ってきたとき（そういうものは時々大西洋のかなたから届いたのであったが）、我々は悪意なく、「こりゃアメリカ的なものだ」と評していたことが今でも思い出される。当時のイタリアは、いまだ主として農業国家であって、それゆえにこそ、我々はアイデンティティーを保ち、外から入ってくる物事を判断するための批評の手段をまだ保持していた。甚大なもの、巨大なもの、桁外れのもののマニアのとりこになっていなかった。私の町の狭い小路を歩いていたキャディラックやオールズモビルに見当たるとき、ヴェスパの方がより機能的であると思って、微笑んだりした。

現在はそうではなくなった。イタリアでも、ヨーロッパでも。我々はアメリカからいかなるものでも受容している。商品、映画、映画を超越する宣伝手段であるテレビ番組。かつては歴史事実に対する完全な無知のため笑いものにされていた、リドリー・スコットの『グラディエーター』のような、古代ローマ時代についての寄せ集め映画まで。近代化の先鋒であるアメリカ化は、堂々と勝利し、何でも単一化してしまった。しかも、単一化が決定的になったのが、ちょうどかの1970年代、アメリカと社会体制に反対したマルクス・レーニン型の学生造反運動の年代であったのは興味深い。青年たちは市街を進み、警察と格闘し、「ヤンキー・ゴー・ホーム」と叫んだりしていたが、家庭に帰ると、『すべての家にバス・ルームと家電製品』となった。その同じ時に、アメリカ人はソ連に対抗する形で、ドイツやイタリアやその他のヨーロッパの国々に新たな軍事基地を設置していた。

現在、ウェイ・オブ・ライフと生活様式の上では、アメリカとヨーロッパとの間に何の違いもない。1980年代初頭にニューヨークをはじめて訪れたときの幻滅は今でも記憶に残っている。どこにもあるヨーロッパの大都会にいる感じだった。ガラス張りのビルの表面にあの有名な摩天楼のスカイラインを見たときにのみ、本当にニューヨークにいることを実感した。神話のニューヨークは映画とテレビのフィクションだけに存在したのであった。バーチャルな手段を通じてのみ見出せるものであった。

1930年代にアメリカとヨーロッパとのあいだに格差をつけていた快適さについては、今や西洋だけではなく、多くの国がアメリカを凌駕したのである。清潔で機能的、効率的、かつ潤滑に運営されている成田か、フランクフルトか、アムステルダム空港から出発して、汚く、がたがたで、不便、潤滑に運営されておらず、エスカレータか、あるいは他の何かがいつも故障中であるニューヨークのジョン・フィッツジェラルド・ケネディー空港に着けば、それを実感するのである。

ウェイ・オブ・ライフの同一性は成長モデルの同一性の結果である。それは、産業的、貨幣的、金融的なものであり、生産＝消費のメカニズムに基づくものである。このメカニズムは問題の因果関係を逆さまにしたのである。我々西洋人は現在、消費のために生産するのではなく、生産するために消費し、場合によっては消費もせず、生産のために生産するだけである。しかも、外から強いられた、実際は人が今まで必要と感じていなかった、常に新しいニーズに基づいたものである。指数関数的成長に基づくモデルはニーズを必要とし、そのためにニーズを創出するのである。そして、消費者をニーズの絶対性について説得するための宣伝や、我々の家庭に先天的に置かれることで、このパラノイア、この強制的消費幻想の決定的な伝達手段となったテレビに基づくものである。

もし西洋というものが、この成長モデルの受容を意味するのであれば、いまや西洋とはヨーロッパとアメリカに相当するのではなく、日本からロシア、中国まで、すべての工業国を西洋として正当的にみなすことができる。もし、元来西洋的でなかったこれらの国々に独特の文化・伝統・思考方式が残っているとしたら、それらはアメリカ化、近代化、グローバル化の拡張の激しさのためにいずれ消えゆく運命となろう。

ヨーロッパが全面的にアメリカの近代的、進歩的な成長モデルを受容したのは、ユダヤ・キリスト教的な思考によって圧倒的に支配されているからである。現代的に理解される進歩の観念は、東洋と中東の古代文化だけではなく、ヨーロッパの古典である古代ギリシア・ローマの文化にとっても異質であった。これらの文化は主としてその時の現在に生き、本質的に非歴史的であった。ユダヤ・キリスト教思想は、歴史過程の進行に目的性を想定することでまったく新しい観念を導入したのである。それは、人類の出来事の移り代わりを神の意図の実現である、とする観念である。このようにして目的論的・進歩論的な歴史の観念は生じてきた。この目的論は、宗教的ではなく、より楽観的な世俗的な意味合いで、啓蒙主義に引き継がれたのである。エドワード・H・カーが述べるように、「歴史は、人間のための、地球上におけるもっとも好ましい状態を目的とする漸次的な進歩の形で理解されるようになった」⁶⁾。ヘーゲルとマルクスはこの状態を獲得するための目標と手段を明確にした。両者にとっても目標は自由の実現であったが、手段はヘーゲルにとっては近代国家であり、マルクスにとっては階級のない社会であった。現在支配的になった自由民主主義は目標と手段を同一視し、歴史の目

⁶⁾ Edward Carr, *Sei Lezioni sulla Storia*, Torino, 1967, p. 118.

的と終着点として、民主主義そのものを同語反復論的に設定したのである。しかし、民主主義は中身を正当化する包装紙に過ぎず、中身は資本主義のレシピによる工業化と経済化である。啓蒙と近代のもう一つの顔であるマルキシズムは、非効率的な工業主義として証明されたことで負けてしまったからである。実際、ジョージ・W・ブッシュ大統領の言葉を借りると、この体制での最高の価値は「自由、民主、と『自由企業』」である。このような生産主義的で世俗的な進歩主義、このような楽観的な歴史論の極端な形態は、普遍的な決定論を生み出した。アメリカの政治学者のフランシス・フクヤマはそれを見事に表現している⁷⁾。彼によると、世界のすべての民族に適用される『人類の普遍的な歴史』があり、目的論的な計画の強靱な論理によって、彼らを『民主主義の約束の地』、『消費の総合的な文明の普及』、『テクノロジーに基づいた資本主義』へと、容赦なく導くことが必須である。確かに今まではその通りであった。しかし、世界のすべてのフクヤマ型人間とブッシュ型人間の思惑にもかかわらず、永久にこの通りに続くはずはない。現在の発展のモデルが基づく指数関数的成長は、数学上は存在しても、実際の世界には存在しないからである。そして、それ以上拡張することが出来なくなる時点で——この時点はひょっとしたら思ったより近いかもしれないが——、ここに到達した時点で、今の体制は自滅するだろう。全体的で総括的なすべての体制の場合と同じく、当時知られたすべての世界を支配するようになったとたんに、ばらばらに砕けしまったローマ帝国と同じように。

ヨーロッパ文明の基盤であったのにもかかわらず、ヨーロッパではギリシア文化が完全に削除され、その代わりに目的論的・進歩論的なユダヤ・キリスト教的思考が支配的となった。ひょっとすると、歴史の目的性を信じず、「過剰なものはあってはいけない」とデルフォイの神殿に刻まれてあったことから判るように、特に一連の神話などを通じて節度の感覚を養っていたその文化は、今になって我々のために大いに役立つかもしれない。つまり、それは存在の悲劇の感覚を有していたのである。この感覚を、1930年代の一部のヨーロッパのインテリが指摘したように、アメリカ人は欠いている。現在、西洋では、アメリカ人だけではなく、我々もそれを失い、無定限な進歩の袋小路に入ってしまった。この進歩は民族と国家に流血の禍をもたらし、我々を最終的なカタストロフィーへと追い込むに違いない。

今日では1930年代と違って、我々ヨーロッパ人はアメリカの生活様式を批判することができなくなった。その単純な理由は、我々の生活様式、経済・テクノロジー・科学上の発展モデルが、先進工業国においてはどこでも同じになったからである。それを『グローバル化』といい、冷酷な経済闘争に世界各国を巻き込むことで、誰もが歩調をあわせなければならないし、誰もが標準化を強いられるのである。そして、ヨーロッパとアメリカ合衆国と、その他の世界の工業国との間にまだ残っている数少ない差異は、徐々に取り除かれてしまうに違いない。ドイツでは、競争力を維持するため

⁷⁾ Francis Fukuyama, *The End of the History and the Last Man*, The Free Press, 1992.

に、いわゆる『ライン・モデル』が解体され、社会福祉制度が最低限に縮小されつつあり、フォルクスワーゲンのような大企業は、賃金を上げることなく労働時間を増やしている。そして、グローバル化が浸透するにつれて、他のヨーロッパ諸国も同じような措置を講じざるを得ないだろう。

現在ヨーロッパがアメリカに浴びせる批判は、ウェイ・オブ・ライフや、経済優先主義や、唯物主義に関するものではなく、生活の範囲には関係しない。それは政治面での批判である。アメリカの外交政策に対する批判である。この政策は、2001年9月11日からではなく、むしろソ連崩壊の1989年からまさに、冒険的、かつ明らかに危険な路線をたどるようになった。ヨーロッパでは、この路線を批判するだけで反アメリカのレッテルを貼られるに足りる状態である。私はこの言語上のテロリズムを拒絶する。たとえ誰かがマダガスカル外交政策を批判するとしても、それだけで反マダガスカル論者とされるはずがない。それと同じように、アメリカ政府への批判もレッテルを貼られずに許されるべきである。ヨーロッパに反アメリカ的先入観が存在することは事実であるが、反面、一般市民よりも為政者のなかに、アメリカの利害にあまりにもこだわる親アメリカニズムが存在することも事実である。それぞれの国の利害と必ずしも一致しないこの親アメリカニズムは、反国家的、そしてほとんど陰謀的と言っても過言ではない。

1989年のソ連の崩壊の後、アメリカの外交政策は次第に攻撃的になっていった。そして、懸念の要因になるのは、アメリカが『国際警察活動』とか、『平和維持活動』とか、『人道的活動』とか、あらゆる名称のもとで起こした戦争そのものよりも、その背景にあるイデオロギーである。アメリカは『善』の代弁者であることを確信し、その善をあらゆる手段を利用して、全世界のいかなる場所でも輸出するという救世天命の担い手であると意識している。アメリカ人は、いかなる時にも、他国人よりも倫理上優れた民であると自覚していた。アメリカはインディアンの虐殺というジェノサイドから生まれ、ローマ帝国の崩壊以来ヨーロッパから事実上姿を消した奴隷制度を長い間維持した唯一の現代国家であったが、これを考えれば、彼らの確信の根拠がどこにあるのかを測りかねる。この確信は、ニュールンベルグと東京の両裁判によって歴史的かつ法的に是認されたのである。これらの裁判によって、歴史上初めて勝利者が敗北者を裁いたのである。勝利者は勝利したことだけに満足せず、自分たちが倫理上の観点からも敗者より優れていることを証明するために、これをもって敗者を裁く権利を主張したのである。これは法の精神からの逸脱である。なぜならば、力と法とは同一であるという結果を生み出すからである。勝利者の力というわけだ。しかし実際には、何百、何千年の法的思考の発展の結果、人類はまったく逆の結論にたどり着いたのである。つまり法が力に優先すると。

善と悪とのあまりにも極端的な区別は、アメリカ合衆国で特に強調されているが、これはアメリカ独特のことではなく、全西洋世界共有の観念で、実際、後で述べられるように、その根源はヨーロッパにある。

事実、オサマ・ビン・ラディンのような人物は、西洋の『影』に過ぎない。民主的で自由的である

と主張して、そうであることを良心的に信じながらも、本質的には原理主義的、全体主義的、絶対主義的である西洋に対する、原理主義、全体主義、絶対主義をもつての反論である。西洋は異質なものを想定せず、容認せず、異質なものはすべて支配的な西洋のモデルに標準化しようとする。ヴォルテールのカンディードがいうように、「可能である世界の中の、よりよい世界」とされるモデルである。我々のモデルがもっともすぐれたものであると信じ、それを輸出し、それを強制することで、第三世界の人々を救出することを当然であるとしているのである。西洋の運命は、ゲーテがメフィストフェレスに言わせた言葉、「我は永久に悪を望み、永久に善を施す精霊である」という言葉を逆さまにしたものであるように見える。西洋の逆説は、善であることを確信し、永久に善を望みながらも、目的の異形発生の過程のように、永久に悪を施してしまうことである。しかし、このあまりにも極端的な善と悪との区別においてこそ、そしてまさにプロメテウスが望んだように、連続的に悪を減らすことで善を増やし、その結果として悪を全世界から駆除するのだという自負にこそ、根本的な問題が潜んでいるのである。善と悪とは同じ事実の両面であり、共に成長するもので、善が大きければ大きいほど悪も大きくなるものであろう。隠喩ぬきでこの抽象的な観念を今日の現実に照らし合わせれば、全世界を西洋の基準に合わせようとする圧力が強くなればなるほど、国際テロの反発も強くなるということである。

西洋の全体主義への偏狂、『万物を帰一』させる普遍的な標準化への意欲、西洋史のほとんどすべてを特徴づけるこの *Vizio oswra* は昔から存在し、ヨーロッパこそが出発地であった。これも逆説的であるが、ヨーロッパ文明の源泉であるギリシアの理念は、異質なものにこそ存在の権利と尊厳を認めているのである。トゥキディデスはペルシア人について述べる時、自分に理解できない奇妙で奇抜な習慣を有する『野蛮人』としてそれらを描いていても、ペルシア人にギリシア文化を押し付けることを決して考えなかった。ギリシア人はギリシア人であり、ペルシア人はペルシア人である、と。

キリスト教の台頭は、事情を抜本的に変化させた。全人類に『福音』を告げることにとどまらず、人々を改宗させることを熱望する宗教伝道に、万物の帰一、異質なものの標準化への志向が萌芽を見せてきた。この志向は、欧州中心主義や、優等文化と下等文化との間の区別と、前者の義務として後者に宗教的、または世俗的な文明を伝導する、という考えに基づく植民地主義や、理性の女神を絶対化し、グローバル化の根底である『世界市民』としての人間の観念を提唱した啓蒙主義運動や、マルクス系のプロレタリア国際主義を経て、アメリカ合衆国の指導のもとに現在支配的になった経済・産業モデルにおいてまさに、もっとも完成された具現化を成し遂げた。このモデルは、キリスト教や、古典的な植民地主義や、マルクス・レーニン主義が試みても実現できなかった、全地球を占領することに成功した。少なくとも成功しつつある。同じ伝導の文化や、優等文化に所属して、最良の生活モデルを創出したという確信の共有によって結ばれて、アメリカとヨーロッパは長い間この計画の実現のために協力してきた。しかし、現在アメリカはひとりで、その覇権を絶対化するために、この計画

をより精力的に追及しているのである。これでアメリカは、帝国としての立場を強化するだけでなく、第二次世界大戦で事実上敗北したヨーロッパが追い込まれた劣勢の状況を恒久化しようとしている。

アメリカとヨーロッパは、二十世紀の最後の十年間を特徴づけたすべての『人道的介入』に、物質面で、またはイデオロギー面でともに参加した。それによって、西洋は他の国の紛争に武装介入を行い、他の国民に、偽善的な監視なしで、自分で自分の歴史を決める、場合によっては戦争をもおこすという、もっとも基本的な権利を拒否することとなった。これは、戦闘の結果を覆して、イラン・イラク戦争や、ソマリア、ボスニア、コソボで実行されたのである。

イラン・イラク戦争での介入は特に重大で意味深いものであった。裏に隠された利害のためではなく、良心的な目的をもって行われる『人道的介入』も、避けようとされている禍よりも、さらに深刻な禍をもたらす事実を証明したからである。(しかし、実際には、あの戦争でも、そしてその後のボスニア、ソマリア、コソボ、アフガニスタンやイラクでも、介入が常にこの隠された利害のために行われているのである。)

1980年に、ホメイニの革命による王政の崩壊の結果、イランが弱体化したことを見込んで、その国を侵略したのはイラクであった。アメリカ、ヨーロッパとソ連が主体となって両陣営に武器を供給することに手一杯だった間の、五年間も継続した流血の戦争の挙句に、少年たちによって構成されたイランのぼろぼろの軍隊は奇跡的にもバスラを占領する寸前までに至った。それはサダム・フセイン政権の崩壊をもたらすような事態だったが、アメリカを初めとする西洋諸国は、悲惨な虐殺を避けるために、イラン軍がバスラに入城することを許してはいけないと叫ぶようになった。イランへの武器供給が中止となり、反面、サダムに多数の武器が供給された。そこには、後にシーア派住民やクルド人に対し使用され、2003年には戦争の口実となった多量破壊兵器も含まれていた。サダムの救出のためペンタゴンの専門家が派遣され、アメリカ軍によるロジスティックと航空管理機能が提供され、米国の軍艦はペルシア湾を巡廻し、直接の介入への故実になる事件が起こるのを探していた。そして事件はついに起きた。アメリカ軍艦がミサイル攻撃を受けた。フランス製の、イラクのミサイルだったが、それは重要でなかった。責任がそのままイランに負わされ、アメリカによる報復行動が正当化された。1988年に、戦場で得た勝利を剥奪されたイランは、平和条約を締結することを余儀なくされた。

『人道的介入』の結果、1985年に終わるはずだった戦争はさらにあと三年間継続し、50万人だった戦死者は150万人まで増加し、しかもこのような虐殺は無駄なものであった。戦争の機能は、決定的に——あるいは、少なくとも長期的に——紛争問題を解決することであるのに、上から強いられたあの平和は、地域に存在した従来の緊張を緩和するどころか、それを悪化させたのである。そして、世界から抹殺されるはずだったフセインは、もっとも進歩した武器を多数に保有するようになり、それらを翌年にクウェートで使用した。これが湾岸戦争の原因となり、この戦争でアメリカの『インテリ

ジェントな爆弾』と『キルルジカル・ミサイル』は16万人の民間人を殺害したのであった。そのなかには、我々の子供となんら変わるところのない、32,195人の子供の戦死者が含まれている。

つまり、10年間、アメリカは平和という大義名分を唱えて、他国の戦争を『不合理的』、『野蛮的』、『非文明的』、『容認できない』ものとして非難し、その戦争に介入し続けてきた。それらの民族には、自分の利害と価値観を保護する権利がなかったかのように。アメリカを筆頭に、西洋諸国は戦争に対して戦い、『平和維持活動』を創出した。

しかし、2001年9月11日に、歴史上はじめてアメリカ合衆国がその領土を攻撃されただけで、そして50年の間、『人道的介入』の『サイド・エフェクト』を除いても、アメリカが正当性のない攻撃やクーデターをもって——アメリカの作家、ゴア・ヴィダルは、挑発されることなしにアメリカが仕掛けた250件の攻撃を数えている——他国に払わせた犠牲にまったく比較できない被害を被っただけで、シナリオは急転回した。数十年間も非難されてきた戦争が、今や必要、緊急、必然的かつ不可避的なこと、しかも聖なることとされしまった。イラン人、イラク人、ソマリア人、セルビア人、クロアチア人やボスニアのイスラム教徒などに拒絶された権利を、アメリカ人は自分自身たちのために提唱した。他国の戦争だけが不合理的であるかのようなのである。しかも、ジョージ・W・ブッシュ大統領は『予防戦争』の理論を提唱するようになった。もし敵対行為ではなく、その嫌疑だけで開戦のために足りるのであれば、それは永久戦争状態を生み出すものである。

ブッシュ大統領はそれをさらに進め、予防戦争を提唱しつつ、2002年9月に議会に当たった報告ではこのように述べた。「大統領は、軍備におけるギャップを縮小することを、いかなる国にも許さないつもりである」と。『いかなる国にも』、つまりヨーロッパの諸同盟国にも。歴史上で初めて、ある特定の国が、自分の利害のために、すべての国の広範な無防備化を事実上強要して、無窮で永遠的な覇権を公理としようとしている。ヒトラーの千年帝国という権力の妄想と同等、あるいはそれ以上のものである。

このように、前例がなく比類なき攻撃性を前提にしながらも、ブッシュは「アメリカは、一方的な自国の利害を追求するためではなく、自由社会の公益のために権力を行使する」と断言することで世界を安心させようとした。世界にはこの言葉を信用するほかに選択肢はない。他方では、もしアメリカが善であるとしたら、悪を施すはずがない、ということだろう。なお、この同じ文書のなかで、「イスラム世界の将来のためにも、思想と価値観の戦い」が約束されているのである。と言うことは、この世界も、西洋の基準に標準化される限りにおいて容認されることだろう。世界全体は、西洋的なアメリカの単一のモデルに適合しなければならない。この文書に謳われているように、「是認できるのは、唯一のモデルであり、それは自由、民主、市場であり、これらの価値をいずれの場所でも保護すべきである」。

到達すべき最終目標は、法律上ではなくとも、少なくとも事実上のアメリカの覇権の下にある単一

の世界国家、アメリカから指導される単一の世界政府、アメリカと北大西洋条約機構の軍事力によって構成される単一の世界の警察、全地球に機能する唯一の成長モデル、世界の単一市場、『偉大なる消費者』という唯一の人間モデルである。

9月11日は、アメリカ人にとって、いかなる教訓にもなっていない様子である。まず、ツイン・タワーの象徴的な意味から始めよう。攻撃は恐るべきことだったが、ビルの非常な高さ、限界の条件、天に対する挑戦状のようなデザインの結果、崩壊はさらに破滅的になった。神々の妬みを起こしてはならぬと、古代ギリシア人であれば言っただろう。

ツイン・タワーの悲劇は反省の材料になるべきであった。度を過ぎた事象には限界があり、限界を超すことは崩壊をもたらす。本質として、連続的な加速を必要とする西洋的成長モデルだが、強制された速度はこのモデルの寿命をさらに短縮し、したがってアメリカの将来を短縮するのである。ブレーキをかけるところか、逆に9・11を契機に、普遍的な覇権の妄想に更なる加速が与えられたのである。目標の達成は同時に彼らの終焉となることに気づかないままに。指数関数的成長に基づくモデルは、征服すべきものをすべて征服した時点で、それ以上成長することが出来ずに、自滅せざるを得なくなるだろう。全世界を包み込んだシステムの崩壊は世界的規模のカタストロフィーを起こすだろう。逆説的に言えば、イスラム・テロは、この進路に抵抗することで、速度を落とし、自滅の時期を遅らせているのである。

ヨーロッパについて見ると、経済の観点からは、この過程に全面的に巻き込まれている。1930年代に一部のエリートは、近代化のカタストロフィーという最終的な結果を見抜かないまでも、少なくともその非人間的な性格を理解して、抵抗していたが、現在、現代化は完全に受容されている。ヨーロッパでは、もはや誰も近代性について論争しない。既成事実として、不可逆的かつ望ましいこととされている。

むしろ、政治的主導権のためにアメリカと争っているのである。運転手の操作に従わない、暴走する電車の運転を完全にアメリカに任せないためである。

数年来、おそらく前出の議会への文書やイラク戦争のときから、ヨーロッパ、より正確に言えば、ヨーロッパ諸国の一部は、すでに15年前には理解すべきだった事実をついに理解するようになった。ソ連崩壊後、友好的なアメリカ、同盟国アメリカに対する我々の立場が完全に変わってしまったことを。

ソ連が存在していた限り、アメリカとの同盟は強いられたものであった。ソ連に西ヨーロッパで軍事的冒険をさせないために必要な威嚇防衛用の軍事力を、アメリカのみが保有していたからである。核兵器による相互的恐喝は、我々ヨーロッパ人も保護したのであった。しかし実際には、これもどこまでが真実であったか疑わしい。1980年代半ばごろ、ロナルド・レーガンは、一瞬的なむき出しの率直さか、或いは軽はずみか、酪酊か、またはアルツハイマー病の前触れのせい、ヨーロッパが「限

定的核戦争の舞台」になりうるということについて口を滑らした。ということは、もしソ連がパリか、ボンか、ローマに原爆を落とした場合、アメリカからモスクワ向けの核ミサイルが即時に発射されることが確実ではなくなり、むしろワルシャワ条約機構の他の国が目標とされたことだろう。つまり、通常兵器の場合にすでに何回も起こったように、核兵器の場合でも米ソの衝突が代理戦争にとどまただろう。

とにかく、この発言にもかかわらず、1989年までヨーロッパ人は、アメリカの核兵器の傘に保護されていると確信していた。当然、本物であったにせよ単なる仮想であったにせよ、この保護のためにアメリカ人は高い代価を受けた。彼らの観点からは、これは正当な事であった。ヨーロッパ諸国は不平等的立場や、限定的主権の状況に置かれ、また、北大西洋条約機構と西欧の各地に分散された、治外法権が与えられた軍事基地による軍事面、それから政治面、経済面、最後に文化面からも属国の地位に置かれてしまった。

現在、ヨーロッパはアメリカの保護を必要としていないので、その代償に見合った何の利益もない属国の状態から脱皮したい意欲があるのは当然である。ヨーロッパは、過去の五十年間のような、受身の『忠実』な同盟国として、忠犬そのもののような立場に残りたくないのみならず、同盟を維持すること自体に利益がないことを分かり初めてきた。アメリカ合衆国は、事実上ライバルになったからである。アメリカが、第二次世界大戦の結果獲得した優位な立場を惜しみなく発揮している経済の分野においては、これは確実であるが、政治の分野でもまた同様である。ヨーロッパにとって、ソ連崩壊以降、アメリカが特にイスラム・アラブ世界に対して示した、侵略的で乱暴な冒険主義に追従することは好ましい事にならない。我々にとって、とりわけイタリアとスペインにとって、移民の問題は除くとしても、この世界が一万キロと離れたものではなく、すぐそこに存在するものであることも一つの理由である。

ヨーロッパでは、遅ればせながらもフランスとドイツとスペインが、アメリカから距離を置くべきときがきたことを理解した。特にスペインの新しい指導者のルイス・ロドリゲス・サパテロは注目すべき人物である。40歳そこそこである彼は、解放者としてのアメリカや、ホロコーストや、ナチスのユダヤ人の虐殺についての永遠の恐喝などの半世紀前の出来事に関して、先輩のリーダーたちを呪縛する精神的な条件から、世代的理由で程遠いところにいるのである。サパテロはイラクから軍隊を速やかに撤退させただけでなく、総選挙のすぐあとに意味深い発言をした。スペインとアメリカとの関係についての質問に、「友好的だ、他の世界諸国と同じように」と答えた。普通の世界だったら当たり前前の回答だが、イタリアのベルルスコーニを始め、世界各国の為政者たちがわれ先にブッシュに媚を売ることと争っている世界の中においては破格の発言である。そして彼はなお、「ドイツとフランスとのすばらしい関係をさらに強化したい」と付け加えた。アメリカに対抗できるような、政治的に強く、結束したヨーロッパのために尽力するという彼の意欲は明らかである。

しかし、強くて結束されたヨーロッパだけでは十分であると思わない。たとえば北大西洋条約機構のようなものが存在する限り、ヨーロッパがアメリカに対する従属の地位に甘んじることになるからである。

より徹底的な政策が必要である。私はかねてから、統合された、中立的な、核武装された、自給自足のヨーロッパを提唱してきた。核武装は、他国を侵略するためではなく、アメリカの真心のない保護から最終的に開放されるためであり、北大西洋条約機構の解体や、ひいては中立立場の確立のための必須条件である。

しかし、私の提言のキーワードは最後の言葉、自給自足である。アメリカの従属の状態から開放されても、世界の自由市場に完全に組み込まれたヨーロッパはグローバル化の代償を払わざるを得ず、政治面での立場を変えたとしても、生活様式は相変わらずアメリカ的で現代的なままに残るだろう。

ヨーロッパは、自らで立つための十分な人口や、市場や、資源や、ノウ・ハウを有するのである。これをもって、グローバル化のもっとも破壊的な結果を逃れることが出来るだろう。世界的な経済競争の路線、皆が皆と冷酷に争う体制が続く限り、——これが最終的なグローバル化である——例えばもし中国で賃金が、生き残りのためのぎりぎりの水準であれば、ヨーロッパでも同様でなければならぬし、もしアメリカで社会福祉制度がなければ、我々も、そうなりつつあるように、その制度を解体しなければならぬ。このような事になろう。

我々ヨーロッパ人も、あなた方日本人も、このような事を目指しているのであろうか？ 我々の生活が無意味な徒労に追い込まれ、国家が富んでも国民が貧しくなり、低賃金の生産者としても、ロボット化された消費者としても、そのために我々が自分の時間を奪われてもよいのだろうか。国家がグローバル的に競争できるために？

競争は減らされるべきだ。より限定された範囲のなかでの競争へと。いうまでもなく、ヨーロッパの自給自足体制のためには代償を払わざるを得ない。多くの商品は手が届かなくなるであろうし、ヨーロッパ諸国の総合的な富はいくらか減少するだろう。しかし、我々はあるにあらゆる品物を余分に保有し、それ以上飲み込む必要はなく、国家としての富を増やすよりも、現在の富をより公正的に分配するほうがよい。我々はよりスリムにならなければならない。あまり競争的ではなく、より質素、より健全、より穏やかな、より人間的な生活様式に帰るといのは緊急事項である。18世紀半ば、イギリス発の産業革命で始まった近代化・グローバル化の過程が、人類の希望を裏切って、生活の質を改善するどころかそれを悪化させ、工業化以前の時代にあった肉体的疲労の代わりに、ノイローゼ、うつ病、挫折感、失敗感や、何よりも生活の意味の喪失をもたらしてしまったことは明白であろう。繁栄は不安をもたらしたのである。今、中国に起きている現象について省察すべきである。そこでは、我々の国で長い間をかけて起きたことが、短期間で起きている。西洋型成長モデルと市場経済の導入による『中国の奇跡』が始まって以来、自殺は若い中国人の第一の死亡原因となり（年間25万件、

自殺未遂 300 万件以上)、大人の第三の死因となっている。

しかし、自給自足の体制は、私の夢とは言えなくとも、ともかく実現の難しい提案である。近代性の神話、現在の成長モデルへの支持、無限的成長の幻想は、その悲劇的な成り行きが明白であるにもかかわらず、超克できないものである。とにかく、右派も、左派も、自由主義もマルクス主義も、双方ともに産業革命の所産であり、近代性と共に生まれ、近代性と共に確立したゆえに、それを討論に附せば、自分のルーツを否定することとなるだろう。そして、世界を支配する『単一の思考』の根拠は、近代性と進歩に対して、自由主義とマルクス主義が育む揺るぎのない信頼によるのである。これらの思想は反面、二世紀も前のものであるので、現代人のニーズを理解できるはずがない。この話は、続ければこの講演のテーマから大きく逸脱してしまう事になるだろう。

したがって、ヨーロッパや日本と中国は、将来にどの政治的姿勢をとっても、成長モデルや、近代化や、グローバル化の観点からの変化は何も起こらないだろうと思う。

しかし、政治的観点からは、違ったシナリオ、しかもやや終末的なシナリオを想定できる。それは、西洋諸国の為政者たちが、自分の都合で国際法を抜本的に改変した結果である。古代ローマ人は、神々は自滅したい人間を狂気にする、と言ったが、アメリカ人もヨーロッパ人も、すべての西洋人はこの状態に陥ってしまったかのようである。彼らは、すべての異質な文化に対し、自分の進路に邪魔になる異質なものに対する支配への焦燥に駆られて、自分の目先の事以上を見なくなり、自分の行動の深い結果を予見することができなくなった。

1999年、アメリカとその他の北大西洋条約機構の諸国は、コソボの独立運動という重大な国内問題と取り組んでいたユーゴスラビアを攻撃した。これは、国内政治に対する軍事介入を許さない、という国際法を侵したものであった。この戦争の正否の問題はさておき、この攻撃と、その後のイラクに対する攻撃が、国際法の新しい観念に基づいていることは重視すべきである。それは、国家の主権の尊重を超越する、倫理上の『普遍的』な価値観、超国家的な人権と自然法の権利が存在するというグローバル的な観念である。もしこの普遍的な価値が犯された場合、『優等』な文化に所属する国々、つまり西洋の国々に、武力介入の権利と義務が認められなければならない。

さて、西洋諸国は、このように行動することによって、国家主権の不可侵性の原理だけではなく、国家への属性の原理も犯したことに気づかなかったようである。国家を超越する価値観が存在することを想定するなら、これらの価値が犯されていると思えば、人間は自分の国の味方につく道徳的な義務から解放されるだろう。しかし、国籍が一義的であるのに対し、『普遍的』とされる価値については議論の余地がある。自分にとって普遍的とされる価値は、他人にとってそうではないかもしれないからだ。しかも、これらの価値についての順序もあり、他の価値に優先する価値の存在も想定できる。たとえば、イラクの問題を見ると、一部の西洋人は、独裁者によって侵害された人権の保護を、戦争、侵略、占領を正当化する不変的な価値と見なしているが、反面、一部の西洋人は、理由は別にせよ、

外国の侵略に抵抗する権利を普遍的な価値と見なしている。そうすると、紛争は国同士の間ではなく、違った普遍的価値観の間のもとなる。したがって、対立は思想的な性格を帯び、それぞれの国の国内を横断する。さながら国際的共産主義の利害が国家的利害を優先するとして、後者を犠牲に前者を主張した国際プロレタリアの時代と同じように。

同じように、心理的価値観の普遍化は、各国と各文化のなか、とりわけ西洋文化のなかで、縦の亀裂を生み出し、紛争の横断的なグローバル化をもたらす。たとえばイタリアでは、イラクに駐留する我々の軍隊を支持する人々がいるし、我々の軍隊に抵抗するイラクのゲリラを支持する人々も存在する。

現在、違った価値観や、対極的な価値観を主張する西洋人の中の争いはただ思想的・政治的であり、社会を脅かすまでに至らないが、人権のグローバル化が進み、事情が深刻化すれば、武力の行使を辞さない紛争へと悪化することも予想できる。そうすると、自分の国に対する忠誠の義務から解放されたイタリア人、あるいはフランス人か、ドイツ人か、アメリカ人が、国家を超越する普遍的な原理、価値、権利に対する道徳的な義務のために、互いに戦うという事態も起こりうるのである。

西洋諸国は、国家主権の不可侵性の原理と、国家への忠誠の原理を犯すことによって、各国国内での、地球的、かつ横断的となる内戦の前提を置いたのである。

(北村 顕一 訳)



[Public Lectures]

Americanismo e Antiamericanismo

— Il Ruolo dell'Europa —

Massimo FINI

Nel marzo del 1931, dopo un breve soggiorno negli Stati Uniti, Paul Hazard scriveva: “Di ritorno a Parigi mi accorgo che per essere alla moda bisogna dir male dell’America, mentre tre o quattro anni fa per essere alla moda bisognava esaltarla oltre misura”¹⁾

Fino ad allora il sogno americano non aveva conosciuto dubbi. Era il sogno della “giovane America”, di una mitica terra della libertà, dell’eguaglianza, del lavoro e del denaro facile, delle *opportunities*, della realizzazione personale, della possibilità di successo per tutti, del benessere diffuso, del *comfort*, del bagno e degli elettrodomestici in ogni casa, del possesso generalizzato dell’automobile, dei miracoli della tecnica, mito che trovava il suo simbolo più citato nei grattacieli che avevano un grande impatto nell’immaginario collettivo degli abitanti della vecchia Europa dove non esistevano ancora. Un sogno, quello americano, la cui capacità di attrazione era documentata dagli emigranti, soprattutto italiani ed irlandesi, che con le loro valigie di cartone, si erano mossi a centinaia di migliaia, a milioni, dall’Europa per inseguirlo.

Agli inizi degli Anni Trenta quel Sogno e quel mito si erano incrinati. Sostanzialmente per due motivi. Uno contingente: la crisi del ’29, particolarmente inquietante per un Paese che aveva puntato tutto, o quasi, sull’economia e pareva fallire proprio in quel settore. L’altro, più profondo, affonda le sue radici nella “cultura della crisi” che, anticipata da Friedrich Nietzsche nella seconda metà dell’Ottocento, si andava rapidamente diffondendo in Europa dopo lo choc della prima guerra mondiale e la scoperta dell’ambivalenza, quantomeno, della tecnica (la guerra era stata un massacro senza precedenti proprio a causa dell’enorme potenzialità distruttiva delle nuove armi tecnologiche, oltre che per le teorie omicide dell’ “attacco frontale” degli Haig e dei Cadorna), cultura che aveva trovato il suo punto di riferimento più famoso nella fortunatissima opera di Oswald Spengler, *Il Tramonto dell’Occidente* (1918–1922). Non per nulla Spengler era partito da Eraclito che, come Esiodo, aveva una visione pessimistica del divenire storico e pensava che il destino dell’umanità fosse di degenerare costantemente.

Era una crisi di fiducia nell’idea di Progresso e nella Modernità e quindi anche dell’America che quel Progresso e quella Modernità incarnava nel modo più evidente e clamoroso.

Mentre Johan Huizinga notava la rapidità con cui in Europa la parola *progresso* fosse scomparsa dalla bocca dei filosofi, degli storici, della gente della strada a partire dalla fine della prima guerra mondiale (2), in America il Progresso e la Modernità rimanevano lo Zenit e la Stella Polare di quella società di cui nemmeno la crisi del ’29 era riuscita a scalfire l’ottimismo.

¹⁾ Paul Hazard, *Un collègue de jeunes filles en Amérique*, Paris, 1931, p. 110.

È qui, agli inizi degli Anni Trenta, che spunta per la prima volta quello che chiamiamo *antiamericanismo*. Non è però un antiamericanismo di tipo politico. Da quando, con la partecipazione alla Grande Guerra,²⁾ gli Stati Uniti avevano acquistato diritto di parola nelle questioni europee, le critiche alla politica USA erano state in realtà molto blande e riguardavano il wilsonismo dei quattordici punti, il democraticismo umanitario, il pacifismo americano (“*quam mutatus ab illo!*”). Nè l’antiamericanismo era, se non in parte, il prodotto dell’emergere dei fascismi europei. Lo diventerà in seguito, ma quando fa la sua prima apparizione, Hitler non era ancora salito al potere (ci arriverà nel 1933), in quanto al fascismo italiano aveva una posizione ambivalente nei confronti dell’America. Come democrazia, anzi la prima e la principale democrazia del mondo, l’America era certamente un potenziale nemico, ma il suo era un “popolo giovane” e in questo in qualche modo affine al popolo italiano che il regime mussoliniano riteneva di aver rigenerato e fatto rinascere quasi “*ex novo*” grazie alla sua Rivoluzione. Inoltre c’era nel fascismo molto interesse per quell’ “arte nuova” che era il cinema, e il cinema, insieme ai grattacieli, era uno dei simboli dell’America.

Lo stesso figlio di Mussolini, Vittorio notava che “il pubblico ormai vuole bene al cinema americano” e osservava che questo affetto era ben riposto se solo si rifletteva alla pesantezza di quello tedesco e alla frivolezza e al carattere antiquato di quello francese. E scriveva: “L’America è giovane mentre l’Europa è stravecchia e di tale situazione risentono i rispettivi pubblici anche sul terreno del semplice divertimento spettacolare ... il pubblico americano è attratto dal senso bambinesco ma felice dell’avventura, e se questo giovinezza gli è data dal non avere secoli di storia e di culture, di sistemi e leggi filosofiche è certo molto piú vicino a quello della nostra balda generazione che a quelle inesistenti, di molti paesi d’Europa”. E concludeva contrapponendo il carattere conservatore del cinema europeo al carattere perennemente innovatore di quello americano.³⁾

Il primo americanismo, l’antiamericanismo che si affaccia agli albori degli Anni Trenta, non deriva quindi dai fascismi, ma è un sentimento comune all’intera Europa, dalla Francia alla Germania, dall’Inghilterra alla Francia, e non ha di mira la politica degli Stati Uniti, ma la ‘way of life’ americana, gli stili di vita americani, i valori americani.

Ciò che adesso si contesta all’America è proprio quello che fino a pochi anni prima era stato ammirato: la tecnica pervasiva (che allora viene spesso chiamata ‘macchinismo’), che tende a standardizzare e uniformare tutto, il *confort* inteso come mollezza, il mito del successo ad ogni costo, il denaro facile, il progresso inteso in senso solo realistico, attivismo forsennato ed ossessivo, il prevalere dell’economia sull’uomo, il distacco da ogni tradizione, la perdita dei valori.

L’Europa, che prima aveva ammirato quasi incondizionatamente gli United States of America, sente ora il pericolo di americanizzarsi. Un pericolo già abbondantemente in atto, perché l’americanizzazione vuol dire in realtà modernizzazione ed è difficile resistere alla modernizzazione. Di fronte all’avanzare dell’americanizzazione-modernizzazione l’Europa cerca di ridefinire una sua specifica identità che non le faccia perdere la propria cultura, le proprie tradizioni, i propri stili di vita, i propri valori, la propria anima. L’Europa non si identifica

²⁾ Johan Huizinga, *La crisi della civiltà* (The Crisis of Civilisation), Torino, 1962, p. 4.

³⁾ Vittorio Mussolini, *Emancipazione del cinema italiano*, in “Cinema”, 25/9/1936, p. 213.

ancora con gli Stati Uniti, che cominciano ad essere considerati figli degeneri perché hanno portato alle estreme conseguenze certe premesse che proprio la cultura europea e la storia europea, con la Rivoluzione industriale e poi con l'Illuminismo che l'ha razionalizzata, ha posto. O perlomeno non si sente di aderire a questa identificazione. Il concetto equivoco ed omnicomprendente di Occidente non esiste ancora, dell'America si parla come dello 'Estremo Occidente' cioè di qualcosa che è 'altro' dall'Europa.

Però si teme la crescente influenza della cultura americana e l'adattarsi degli europei agli stili di vita d'oltreoceano. Lo stesso cinema hollywoodiano, inizialmente ammirato e che, grazie alla sua tecnica superiore, ha invaso i mercati e le sale europee, viene ora sentito come una formidabile arma di propaganda dei valori americani, come lo strumento più efficace di un'avanzante e irresistibile colonizzazione. Secondo Leo Longanesi,⁴⁾ un importante intellettuale italiano di quegli anni, "la cinematografia americana è solo tecnica", ma attraverso la tecnica immette nella vecchia Europa i germi della faciloneria, del bambinismo, della fasullaggine, dell' 'happy end' e della mancanza di quel senso del tragico dell'esistenza che è sempre stato una peculiarità della cultura europea (4). Anche nel cinema, come nel resto, la tecnica diventa un pericolo più che una qualità. E, attraverso il cinema, si attacca pure la cultura di massa di cui l'America è pure l'emblema. Si arriva a preferire il cinema sovietico (la famigerata *La corazzata Potiomkin*), pur esso, ovviamente, propagandistico, ma non vacuo come quello americano perché "al contrario, vuol rendere lo spettatore più intelligente, più pensoso, più critico".⁵⁾ È il giudizio, espresso nel 1939, di un critico italiano, Corrado Sofia, ma largamente condiviso dalle elites intellettuali europee e favorito, adesso sí, dall'avanzata dei totalitarismi antidemocratici.

E intanto ci si guarda attorno. Per vedere se sia possibile un modello di modernizzazione che non cancelli cultura, tradizioni e passato, come ha potuto fare l'America che passato non ha.

Si guarda al Giappone. Anche il Giappone è visto, come l'America, in modo bivalente. Da una parte è "il pericolo giallo" che si sta facendo realtà (C'è sempre, negli incubi europei e occidentali, un 'pericolo giallo', oggi è la Cina) perché si impadronisce delle tecniche e dei modelli organizzativi che proprio l'Occidente gli fornisce, li copia, li migliora, li perfeziona e invade i nostri mercati. D'altro canto però sotto questa americanizzazione e modernizzazione di superficie, il Giappone ha conservato le proprie antiche e quasi arcaiche tradizioni, una fortissima gerarchia sociale, un senso samurai della disciplina applicato alla fabbrica. Questo, naturalmente, negli Anni Trenta e secondo la visuale europea. Un esempio dunque da imitare se l'Europa vuole modernizzarsi senza americanizzarsi, senza cioè perdere le proprie tradizioni, il proprio passato, sé stessa.

Con l'approssimarsi della guerra, l'antiamericanismo in Europa si farà più virulento e vessillifere saranno, naturalmente, le dittature fasciste. L'America non è più solo il Paese dell'omologazione e della standardizzazione, della superficialità, della faciloneria, ma è il Paese dove a petto di un'uguaglianza formale, peraltro sconfessata dalle discriminazioni razziali, c'è una formidabile disuguaglianza sociale, attorno ad un manipolo di ricchi e di ricchissimi c'è un mare di miseria. Il Paese dove i lavoratori non hanno alcuna tutela, dove la democrazia una è una finzione perché è solo l'involucro legittimamente dei colossali affari delle Corporation. Ed è infine il Paese del

⁴⁾ Leo Longanesi, *L'Italiano*, Numero Speciale, January/February 1933.

⁵⁾ Corrado Sofia, *Il cinematografo affare di Stato*, in "Critica fascista", 1/4/34, p. 39.

gangsterismo, del banditismo, della violenza.

Il mito americano tornerà in auge con la vittoria nella seconda guerra mondiale. Ma benché gli americani siano circondati di un'aureola trionfale, perché hanno salvato il Vecchio Continente dalla barbarie nazista, la loro cultura fa ancora qualche fatica a penetrare. Mi ricordo che negli Anni Cinquanta quando in Italia arrivava dagli Stati Uniti qualcosa di kitsch—come spesso arrivava da oltreoceano—noi dicevamo, bonariamente, è “un'americanata”. Perché, per quanto Paese ancora largamente contadino, e forse proprio per questo, avevamo ancora una nostra identità e gli strumenti critici per giudicare ciò che ci veniva dall'esterno. Non ci aveva ancora preso la mania del grandioso, dell'enorme, dello smisurato. Di fronte alle *Cadillac* e alle *Oldsmobile*, che si inrodivano nelle nostre viuzze storiche, sorridevamo e ci pareva più funzionale la Vespa.

Oggi non è più così. Né in Italia né in Europa. Dall'America noi accettiamo tutto: prodotti, cinema, programmi TV (che è il grande strumento di propaganda che si è aggiunto, superandolo, al cinema) e persino indigeribili polpettoni storici sulla romanità che un tempo prendevamo in giro per l'assoluta mancanza di conoscenza della nostra storia (tipo *Il gladiatore* di Ridley Scott). L'americanizzazione, o per meglio dire la modernizzazione di cui gli Stati Uniti sono solo la punta di lancia, è ormai passata trionfalmente, omologando tutto. Ed è curioso che questa omologazione sia diventata definitiva proprio negli Anni Settanta, cioè gli anni della contestazione giovanile, di stampo marxista-leninista, al ‘sistema’ e all'America. I ragazzi scendevano in piazza, facevano a botte con la polizia, urlavano “yankee go home!” e “Nixon boia” (sia detto tra parentesi, il miglior presidente che gli Stati Uniti abbiano avuto nel dopoguerra), ma quando rientravano nelle loro abitazioni trovavano “bagno ed elettrodomestici in ogni casa”, mentre gli americani, in funzione antisovietica piazzavano nuove basi militari in Germania, in Italia e altrove in Europa.

Oggi non c'è più alcuna differenza tra la ‘way of life’ e gli stili di vita americani e quelli europei. Mi ricordo la delusione che provai la prima volta che andai a New York nei primi Anni Ottanta. Mi sembrava di essere in una qualsiasi grande città europea. Mi resi conto di essere davvero a New York solo quando riflessa in una facciata di vetrocemento vidi la famosa *skyline* dei grattacieli. La New York mitica resisteva solo nell'immaginario dei suoi film e della TV. Solo attraverso i mezzi del virtuale era ancora riconoscibile.

Quanto al confort, che negli Anni Trenta costituiva una delle differenze tra America ed Europa, molti Paesi, non solo occidentali, hanno oggi superato gli Stati Uniti. Basta partire dall'aeroporto Narita di Tokyo o da quello di Francoforte o di Amsterdam, lindi, funzionali, efficienti, rapidi, e approdare al John Fitzgerald Kennedy di New York, sudicio, slabbrato, lento, scomodo, sempre con qualcosa di rotto e che non va, come le scale mobili, per rendersene conto.

L'identità della ‘way of life’ è la conseguenza dell'identità del modello di sviluppo, che è lo stesso: industriale, monetario, finanziario basato sul meccanismo produzione-consumo (che ha invertito i termini della questione: noi occidentali, oggi, non produciamo più per consumare, ma consumiamo per produrre e alle volte non consumiamo neppure, produciamo per produrre e basta), sulla creazione di bisogni eterodiretti e sempre nuovi, di cui l'uomo, per la verità, non aveva mai sentito il bisogno (il modello, fondato sulle crescite esponenziali ha bisogno del bisogno: perciò lo crea), sulla pubblicità per convincere il consumatore della inderogabilità di questi biso-

gni e sulla TV come il veicolo determinante, perché piazzata a priori in casa nostra, in questa faglia, questa compulsiva ossessione consumistica.

E se Occidente significa l'adozione di questo modello di sviluppo, Occidente oggi non corrisponde più solo all'Europa e agli Stati Uniti, ma si può chiamare Occidente, legittimamente, ogni Paese industrializzato, dal Giappone alla Russia ed alla Cina. E se in alcuni di questi Paesi, in partenza non occidentali, resistono ancora culture, tradizioni, mentalità autoctone sono fatalmente destinate a sparire col tempo davanti all'espandersi ed alla violenza non tanto dell'americanizzazione, che ne è solo una parte, seppure importante, ma della modernizzazione e della globalizzazione che sono il vero nocciolo della questione.

L'uniformarsi totalmente dell'Europa al modello di sviluppo modernizzante e progressista americano è dovuto anche al fatto che nel Vecchio Continente ha prevalso di gran lunga il filone di pensiero giudaico-cristiano. L'idea di progresso, così come modernamente la intendiamo, era infatti estranea non solo alle antiche civiltà orientali e mediorientali, ma anche alle culture classiche dell'Europa: la cultura greca e quella latina. Queste vivevano soprattutto nel presente, erano sostanzialmente *astoriche*. Fu il pensiero giudaico-cristiano ad introdurre un elemento del tutto nuovo postulando un fine verso cui si dirigerebbe l'intero processo storico: l'attuazione del disegno di Dio attraverso la vicenda umana. Nasceva così la concezione teleologica e progressista della Storia. Questa teleologia fu ripresa in chiave non più relegiosa ma mondana, epper ancora più ottimistica, dall'Illuminismo. "La Storia" scrive Edward H. Carr "fu concepita sotto forma di evoluzione avente come fine la miglior condizione possibile dell'uomo sulla terra".⁶⁾ Hegel e Marx precisarono il fine ed i mezzi per raggiungerla. Il fine era, per entrambi, la realizzazione della libertà il mezzo era lo Stato moderno per Hegel, la società senza classi per Marx. Per la liberaldemocrazia, che oggi è egemone e che fa coincidere scopo e mezzi, il fine, la fine, della Storia è, tautologicamente, la democrazia stessa. Che, beninteso, non è che l'involucro legittimante della vera polpa: l'industrialismo e l'economia in salsa capitalista, visto che il Marxismo, l'altra faccia dell'Illuminismo e della Modernità si è rivelato un industrialismo inefficace e quindi perdente. E infatti i valori supremi di questo sistema, per esprimerci con le parole del presidente americano George W. Bush, sono "la libertà, la democrazia e la *libera intrapresa*." Questo progressismo industrialista e laico, questa forma estrema di storicismo ottimista, ha creato un determinismo universalistico che è bene espresso dalle parole del politologo americano Francis Fukuyama secondo il quale esiste una *Storia universale dell'umanità* valida per tutti i popoli del mondo che sarebbero inevitabilmente ed inesorabilmente condotti, dalla ferrea logica di questo disegno finalistico, verso la "Terra Promessa della democrazia", della "diffusione di una cultura generale del consumo", del "capitalismo su base tecnologica".⁷⁾ E così è stato effettivamente, finora. Ma così non sarà—con buona pace di Fukuyama e di tutti i Fukuyama e dei Bush della Terra—per sempre. Perché le crescite esponenziali su cui si basa l'attuale modello di sviluppo esistono in matematica, non in natura. E quando non avrà più la possibilità di espandersi—momento che potrebbe essere anche più vicino di quanto non si pensi—il modello crollerà su se stesso, come è sempre accaduto a tutti i sistemi totalitari e totalizzanti, come avvenne con l'Impero Romano che, appena finito di conquistare tutto il

⁶⁾ Edward H. Carr, *Sei Lezioni sulla Storia*, Torino, 1967, p. 118.

⁷⁾ Francis Fukuyama, *The End of History and the Last Man*, The Free Press, 1992.

mondo allora conosciuto, si frantumò in mille pezzi dando origine al feudalesimo europeo.

In Europa è stata invece completamente rimossa, a pro del pensiero finalista e progressista giudaico-cristiano, la cultura greca, che pur è alle radici della nostra civiltà, della civiltà europea intendo. E che invece ci sarebbe oggi molto utile perché non credeva alle finalità della storia e, soprattutto, coltivava, attraverso una serie di miti, il senso del limite e della misura (“Niente di troppo” stava scritto sopra l’oracolo di Delphi). Aveva cioè quel senso tragico dell’esistenza che, a detta di alcuni intellettuali europei degli Anni Trenta, mancava agli americani e che oggi tutti, in Occidente, americani o no, abbiamo perduto cacciandoci nel vicolo cieco del progresso indefinito che, oltre a far grondare sangue a popoli e Nazioni, non può che portarci alla catastrofe finale.

Oggi quindi noi europei non possiamo, a differenza di quel che si faceva negli Anni Trenta, criticare la “way of life” americana e gli stili di vita americani per la semplice ragione che sono anche la nostra “way of life” ed i nostri stili di vita e il modello di sviluppo economico, tecnologico, scientifico è lo stesso in tutto il mondo industrializzato. È quella che si chiama *globalizzazione* che, nella spietata lotta economica che coinvolge ogni Paese del mondo, obbliga tutti ad adeguarsi e a uniformarsi. E le poche differenze che ancora rimangono fra Europa e gli Stati Uniti e il resto del mondo industrializzato dovranno essere a poco a poco appianate. In Germania, per essere competitivi, stanno smantellando il cosiddetto “modello Renano”, riducendo al minimo il *welfare* e alcune grandi aziende, come la Volkswagen, hanno già aumentato l’orario di lavoro senza però aumentare i salari. E così, procedendo la globalizzazione, dovranno fare anche tutti gli altri Paesi europei.

Le critiche quindi che oggi dall’Europa si muovono agli Stati Uniti non riguardano più la ‘way of life’, l’economicismo, il materialismo, eccetera, in cui siamo tutti coinvolti, non hanno più a che fare con l’ambito esistenziale. Sono critiche politiche. Alla politica estera degli Stati Uniti che, non dall’11 settembre del 2001, ma dal 1989, col crollo dell’Unione Sovietica, ha preso un andazzo decisamente avventurista e sommamente pericoloso. Ciò basta, in Europa, per essere bollati come *antiamericani*. Io rifiuto questo terrorismo concettuale. Non è che se uno critica la politica estera del Madagascar è, per ciò stesso, antimalgascio. Critica semplicemente la politica di un paese. E così deve essere lecito criticare il governo americano come qualsiasi altro governo del mondo senza essere marchiati a priori. E se è pur vero che esistono in Europa pregiudizi antiamericani, ancor più vero è che esiste, e molto più diffuso tra le leaderships politiche ed intellettuali che tra la popolazione, un filoamericanismo talmente appiattito sugli interessi degli Stati Uniti, che non sono necessariamente i nostri, da poter essere considerato antinazionale e quasi eversivo.

Dopo il 1989, col collasso del loro contraltare storico, l’Unione Sovietica, la politica estera americana si è fatta progressivamente sempre più aggressiva. Ciò che inquieta non sono solo e non tanto le guerre che da allora gli Stati Uniti hanno inanellato, sia pur chiamandole inizialmente con altro nome (‘missione di polizia internazionale’, ‘intervento umanitario’, ‘operazione di peace keeping’), ma l’ideologia che vi sta alle spalle. La convinzione americana di rappresentare il Bene e di avere quindi la missione messianica di esportarlo per ogni dove, con le buone o con le cattive. Gli americani, non si capisce bene in base a quali presupposti, dato che la loro storia nasce da uno spietato genocidio, quello dei pellerossa, e che gli Stati Uniti sono stati per lungo tempo l’unico Stato moderno a praticare la schiavitù che in Europa era scomparsa dall’epoca romana (i ‘servi della gleba’ sono

contadini legati alla terra del feudatario, che peraltro è anche la *loro* terra dalla quale non si possono allontanare ma non possono nemmeno essere cacciati, ma non sono schiavi), si sono sempre percepiti come un popolo moralmente migliore degli altri. Questa convinzione ha avuto la sua sanzione storica e giuridica con Norimberga e Tokyo dove, per la prima volta nella Storia, i vincitori hanno processato i capi dei vinti invece di passarli per le armi, onestamente e senza ipocrisie, come era stato fino ad allora. I vincitori cioè non si accontentavano più di essere tali, ma pretendevano di essere moralmente migliori dei vinti, al punto di avere il diritto di processarli e giudicarli. Che è un'aberrazione giuridica. Perché fa coincidere il diritto con la forza: la forza del vincitore. Ora, ci sono voluti migliaia di anni di elaborazione giuridica per affermare esattamente il contrario: il prevalere della forza del diritto sul diritto della forza.

Questa distinzione manichea tra Bene e Male ha una particolare enfasi negli Stati Uniti, non è però esclusivamente americana, ma appartiene all'intero mondo occidentale, anche perché, come vedremo tra poco, ha le sue radici proprio in Europa.

E, in fondo, Osama Bin Laden, o chi per lui, non è che l' 'ombra' dell'Occidente, una risposta fondamentalista, integralista, totalitaria a un Occidente che, nonostante si definisca e creda, in buona fede, democratico e liberale, è integralista, fondamentalista, totalitario. Perché non concepisce e non tollera l' 'altro da sé' che, in un modo o nell'altro, deve essere omologato al modello egemone, occidentale, che si considera, per dirla con il Candide di Voltaire, "il migliore dei mondi possibili". Se il nostro modello è il migliore perché non esportarlo e, quando il caso, imporlo anche agli altri, andando a salvare Safia e tutte le possibili Safia del mondo, anzi del Terzo Mondo? Il destino dell'Occidente sembra quello di essere condannato a capovolgere, in un doloroso contrappasso, la battuta che Goethe nel *Faust* mette in bocca a Mefistofele: "Io sono lo spirito che vuole eternamente il Male ed opera eternamente il Bene". Il paradosso dell'Occidente è crederci il Bene, di volere eternamente il Bene, e di operare eternamente, in una sorta di eterogenesi dei fini, il Male. E il vizio di fondo sta proprio in questa distinzione manichea tra il Bene ed il Male e nella pretesa prometeica di aumentare continuamente il Bene a spese del Male cancellandolo dalla faccia della terra, senza rendersi conto che nella realtà Bene e Male sono due facce della stessa medaglia e con crescono insieme, e tanto più grande è il Bene, tanto più grande sarà anche il Male. Fuor di metafora, e per applicare questo concetto astratto alla concretezza dei nostri giorni, tanto più cresce in Occidente la volontà di omologare a sé l'intero esistente, tanto più sarà forte la risposta del terrorismo internazionale.

La tabe totalitaria dell'Occidente, questa volontà di omologazione universale e di 'reductio ad unum', questo vizio oscuro che segna quasi tutta la sua storia parte da lontano ed ha origini proprio in Europa. Ed anche questo è un paradosso perché fu proprio il pensiero greco, che è all'origine della civiltà europea, il primo a riconoscere il diritto di esistenza e la dignità dell' 'altro da sé'. Quando Tucidide parla dei Persiani, li descrive come 'barbari', con stili di vita e costumi bizzarri e per lui incomprensibili, ma non si sognerebbe mai di imporre la cultura greca ai Persiani. I Greci sono una cosa e i Persiani un'altra.

Con l'avvento del cristianesimo le cose cambiano radicalmente. Nell'*evangelizzazione*, cioè nell'urgenza non solo di annunciare la 'buona novella' al prossimo ma di convertirlo ad essa, c'è già, sia pure *in nuce*, l'ambizione della *reductio ad unum*, dell'omologazione a sé di ogni 'altro da sé', che passerà poi per l'eurocentrismo,

per il colonialismo classico, che si basa sulla distinzione tra culture 'superiori' e 'inferiori' e il dovere delle prima di portare la civiltà, laica e religiosa, alle seconde, per l'Illuminismo, con l'assolutizzazione della Dea Ragione e la concezione, prettamente globalista, dell'uomo come 'cittadino del mondo', per l'internazionalismo proletario di derivazione marxista ("la Rivoluzione o è permanente o non è" proclama Leone Trozskij), e che trova infine la sua realizzazione nel modello di sviluppo economico e industriale attualmente egemone di cui gli Stati Uniti sono la guida. A questo modello è riuscito, o sta riuscendo, quello che il cristianesimo, il colonialismo classico, il marxismo-leninismo, avevano solo tentato: l'occupazione dell'intero pianeta. In questo disegno universalistico Stati Uniti ed Europa sono stati a lungo uniti, accumulati dalla stessa cultura dell'evangelizzazione, dalla convinzione di appartenere a una cultura superiore e di aver creato il modello di vita migliore, anche se gli Stati Uniti l'hanno portato avanti con maggior forza persuasi come sono di poter in tal modo, non solo conservare la propria egemonia imperiale ma di renderla totale, mantenendo l'Europa nelle condizioni di minorità in cui è precipitata dopo la seconda guerra mondiale.

Stati Uniti ed Europa hanno partecipato insieme, materialmente ed ideologicamente, a tutti gli 'interventi umanitari', che hanno caratterizzato l'ultimo decennio del Novecento, con cui l'Occidente si è intromesso, con le armi, nei conflitti altrui negando agli altri popoli il diritto elementare di filarsi da sé la propria storia e, se del caso, di farlo anche con la guerra, senza pelose supervisioni. Ciò è avvenuto nella guerra Iraq-Iran, in Somalia, in Bosnia, in Kosovo, sovvertendo il verdetto del campo di battaglia.

Particolarmente grave e significativo è stato l'intervento nella guerra Iran-Iraq perché dimostra che gli 'interventi umanitari', anche quando siano compiuti con le migliori intenzioni e non per interessi mascherati (come è invece sempre stato, e come è stato in quella guerra e poi in Bosnia, in Kosovo, in Afghanistan, in Iraq), provocano guai molto maggiori di quelli che si diceva di voler evitare.

Era stato l'Iraq, nel 1980, ad aggredire l'Iraq, contando che la caduta dello Scià ad opera della Rivoluzione khomeinista avesse indebolito quel Paese. Dopo cinque anni di guerra sanguinosa, in cui americani, europei e sovietici si erano occupati soprattutto di rifornire di armi i contendenti perché potessero ammazzarsi meglio (non olet), l'esercito di *basij*, di ragazzini, di straccioni armati alla yemenita di Khomeini, un autentico *esercito di popolo* per usare l'espressione di von Clausewitz, aveva fatto il miracolo: era davanti a Bassora e stava per prenderla. Ciò avrebbe provocato la caduta immediata di Saddam Hussein ('l'impresario del crimine' come lo chiamava Khomeini), la riunione dell'Iraq sciita all'Iran (si tratta della stessa gente), l'indipendenza dei curdi iracheni e quindi un più ragionevole assetto di quella regione costituita arbitrariamente e cerveloticamente in uno Stato (l'Iraq appunto) dagli inglesi nei primi anni Trenta. Ma gli occidentali, americani in testa, cominciarono a gridare che non si poteva permettere alle 'orde iraniane' di entrare a Bassora: sarebbe stata una strage, un eccidio, un genocidio. All'Iran vennero tolte tutte le forniture, mentre Saddam fu rimpinzato di armi, compreso le famose 'armi di distruzione di massa' che il rais avrebbe poi usato sugli sciiti e sui curdi iracheni e che sarebbero servite come pretesto per la guerra del 2003. In soccorso di Saddam arrivarono i 'consiglieri' del Pentagono e la logistica e il controllo aereo della U.S. Force, mentre navi americane cominciarono ad incrociare nel Golfo cercando l'incidente che permettesse loro un intervento più diretto e che alla fine avvenne: un naviglio USA fu colpito da un mis-

sile. E poco importava che il missile fosse iracheno e di fabbricazione francese, la responsabilità fu ugualmente appioppata agli iraniani il che consentì agli americani di legittimare azioni di rappresaglia. Nel 1988 l'Iran, cui era stata sottratta una vittoria sacrosanta conquistata sul campo di battaglia, fu costretto a firmare la pace.

Risultato dell' 'intervento umanitario': la guerra che sarebbe finita nel 1985 era durata tre anni ancora, i morti che erano stati 500 mila salirono a un milione e mezzo e tutto questo sangue era stato versato inutilmente, dall'una e dall'altra parte, perché se la guerra ha mai una funzione è quella di decidere un conflitto una volta per tutte (o comunque per un lungo periodo), mentre quella pace coatta, imposta dall'alto, aveva lasciato nella regione le tensioni di sempre, le aveva anzi esasperate, con la presenza di un Saddam che, invece di essere spazzato via dalla faccia della terra, come abbondantemente meritava, si ritrovava pieno zeppo di armi fra le più sofisticate che rovesciò immancabilmente sul Kuwait l'anno successivo. Ciò causò la prima guerra del Golfo dove, sotto le luminarie e i fuochi d'artificio che ci fece vedere il glorioso Peter Arnett, le 'bombe intelligenti' e i 'missili chirurgici' americani uccisero 160 mila civili, fra cui 32.195 bambini che non sono meno bambini dei nostri.

Insomma per un decennio gli Stati Uniti si sono intromessi, in nome della pace, nelle guerre altrui scomunicandole, dichiarandole 'assurde', 'barbare', 'incivili', 'intollerabili', 'inaccettabili' come se quei popoli non avessero il diritto di difendere i loro interessi e i loro valori. L'Occidente, con gli Stati Uniti in prima fila, aveva dichiarato guerra alla guerra e si era inventato le 'operazioni di peace keeping'.

Ma è bastato che l'11 settembre del 2001 gli americani fossero colpiti, per la prima volta nella loro storia, sul proprio territorio, con un modesto pedaggio di vittime, nemmeno lontanamente paragonabile a quello che in cinquant'anni avevano fatto pagare agli altri, con i loro 'golpe' e i loro attacchi ingiustificati (lo scrittore statunitense Gore Vidal ha calcolato in 250 gli attacchi sferrati dagli USA senza essere stati provocati), non contando gli 'effetti collaterali' dei loro 'interventi umanitari', che lo scenario è cambiato di colpo. Dopo decenni di scomunica la guerra è ridiventata, improvvisamente, necessaria, improcrastinabile, ineludibile, sacrosanta, anzi santa. E il diritto che avevano negato agli iraniani, agli iracheni, ai somali, ai serbi, ai croati, ai musulmani bosniaci, gli americani lo hanno rivendicato per sé. La guerra era 'assurda' solo quando la facevano gli altri. E il presidente degli Stati Uniti, George W. Bush, ha elaborato la teoria della 'guerra preventiva' che nessuno mai, nella millenaria vicenda umana, aveva osato avanzare apertamente, nemmeno Hitler, nemmeno, retrocedendo nel passato, l'Impero romano, la più espansionista, aggressiva e bellicista potenza del mondo antico, perché il 'si vis pacem para bellum' non è ancora la 'guerra preventiva'. La guerra preventiva significa, infatti, puramente e semplicemente, la guerra permanente se basta non un atto di ostilità ma il suo sospetto per sostenerla.

Ma il presidente americano si è spinto anche più in là. In un rapporto inviato al Congresso nel settembre 2002, in cui annunciava la teoria della 'guerra preventiva', Bush scriveva testualmente: "Il Presidente non intende minimamente consentire ad alcuna potenza straniera di colmare l'enorme divario apertosi negli armamenti". *Ad alcuna potenza straniera*, cioè anche agli alleati europei. Ed è la prima volta nella Storia che un Paese pretende, di fatto, il disarmo generalizzato di tutti gli altri, a suo favore, postulando un'egemonia infinita, eterna, qualcosa che assomiglia e anzi supera i deliri di onnipotenza di Adolf Hitler col suo "Reich dei mille anni".

Dopo queste premesse di un'aggressività senza precedenti e senza pari, Bush cercava di rassicurare il mondo

affermando che “l’America userà la sua potenza per il bene delle società libere, non per avvantaggiarsene unilateralmente”. Gli altri devono fidarsi: sulla parola. Del resto, se l’America è il Bene, come può operare il Male? Il documento promette inoltre “una battaglia di idee e di valori anche per il futuro del mondo islamico”. Cioè questo sarà accettato solo nella misura in cui si omologherà all’Occidente. Il mondo, tutto, dovrà uniformarsi a un unico modello, quello americano e occidentale. Dice infatti ancora questo documento: “C’è un unico modello sostenibile: la libertà, la democrazia, l’impresa, valori che devono essere difesi ovunque”.

L’obbiettivo finale è di arrivare, di fatto se non proprio di diritto, ad un unico Stato mondiale ad egemonia americana, ad un unico governo mondiale guidato dagli Stati Uniti, ad un’unica superpolizia mondiale costituita dalle forze militari USA e della NATO, ad un unico modello di sviluppo operante in tutto il pianeta, a un unico mercato mondiale, e a un unico tipo d’uomo: il Grande Consumatore.

L’11 settembre sembra non aver insegnato nulla agli americani, a cominciare dal simbolismo delle Torri Gemelle. L’attentato è stato terribile ma è stato reso ancora più devastante dal crollo delle Torri dovuto alla loro spropositata altezza, alle loro condizioni-limite, alla sfida che, di per sé, portavano al Cielo. Non bisogna provocare la *phthónos theón*, l’invidia degli Dei, avrebbero detto gli antichi Greci.

Gli americani avrebbero potuto e dovuto prendere avvio dalla tragedia delle Torri per riflettere. Ogni eccesso trova inevitabilmente il suo limite che ne costituisce anche il crollo. Alla velocità cui stanno portando il modello di sviluppo occidentale, che già per sua dinamica interna ha bisogno di una continua accelerazione, ne stanno accorciando il futuro e quindi il loro stesso futuro. Ma invece di frenare hanno preso l’abbrivio dall’11 settembre per dare un’ulteriore spinta ai loro deliri di egemonia universale. Senza rendersi conto che il raggiungimento della loro meta segnerà anche la loro fine. Perché quando un modello basato sulle crescite esponenziali non avrà più possibilità di espandersi, avendo conquistato tutto il conquistabile, crollerà su se stesso. E il crollo di un sistema divenuto planetario provocherà una catastrofe altrettanto planetaria. Paradossalmente è proprio il terrorismo islamico che, opponendosi a questa avanzata, dà loro una mano a non autodistruggersi in tempi che sarebbero altrimenti ancora più rapidi.

Quanto all’Europa, dal punto di vista economico è totalmente coinvolta in questo processo. La modernizzazione, a cui alcune élites del Vecchio Continente si opponevano negli Anni Trenta, intuendone, se non il catastrofico destino finale, la disumanità, è oggi completamente introiettata dagli europei. Nessuno più, in Europa, mette in discussione la Modernità, che è un dato acquisito e ritenuto irreversibile, oltre che comunque positivo.

Si lotta piuttosto per l’egemonia politica, per non lasciare totalmente in mano agli americani la guida illusoria di un treno impazzito che va comunque per conto suo e i cui comandi non rispondono più al manovratore.

È da pochi anni, probabilmente proprio partendo da quel documento al Congresso che abbiamo citato e poi con la guerra all’Iraq, che l’Europa o meglio alcuni Paesi europei hanno capito quello che avrebbero dovuto capire già tre lustri fa: che la nostra posizione nei confronti dell’ ‘amico americano’, dell’alleato americano, è radicalmente cambiata dopo il crollo dell’URSS.

Finché infatti è esistita l’Unione Sovietica l’alleanza con gli Stati Uniti era obbligata, perché erano i soli a possedere il deterrente nucleare necessario per dissuadere l’ ‘orso russo’ dal tentare avventure militari nell’Europa

dell'Ovest. Il ricatto atomico incrociato proteggeva anche noi. Per la verità nemmeno questo era certo fino in fondo, da quando alla metà degli anni Ottanta Ronald Reagan, in un momento di brutale sincerità o di disattenzione o di ubriachezza o di inizio di Alzheimer, si era lasciato sfuggire che l'Europa avrebbe potuto essere teatro di un "conflitto nucleare limitato". E cioè che non era affatto scontato che se i sovietici avessero sganciato un'atomica su Parigi, su Bonn o su Roma, dall'America sarebbero partiti immediatamente missili nucleari diretti a Mosca, ma sarebbero piuttosto stati colpiti altri Paesi del Patto di Varsavia. Insomma USA e URSS si sarebbero fatti la guerra nucleare per interposta persona, come già avevano fatto in molte occasioni con le armi convenzionali.

Comunque sia, nonostante questa dichiarazione di Reagan, la convinzione europea, fino al 1989, era rimasta quella che noi eravamo protetti dall'ombrello nucleare americano.

Naturalmente questa difesa, o supposta difesa, gli americani, giustamente dal loro punto di vista, ce l'hanno fatta pagare a caro prezzo, tenendo i Paesi europei in uno stato di minorità, di sovranità nazionale limitata e di sudditanza innanzitutto militare, attraverso la NATO, le varie basi USA, extraterritoriali, disseminate per tutto il Vecchio Continente, e quindi politica, economica e, alla fine, anche culturale.

Oggi l'Europa non ha più bisogno della difesa degli Stati Uniti e ha l'ovvio interesse a svincolarsi da una sudditanza di cui paga ancora i prezzi senza averne più i benefici. L'Europa non ha più interesse ad essere alleata 'fedele' degli americani com'è stata per cinquant'anni, supinamente ('fedeli' sono solo i cani), ma non ha più nemmeno interesse ad essere alleata. Perché gli americani sono, di fatto, dei nostri avversari. Lo sono sicuramente in campo economico dove fanno valere, senza scrupoli, le loro infinite rendite di posizione acquistate con la vittoria nella seconda guerra mondiale. Ma lo sono anche dal punto di vista politico. L'Europa non ha alcuna convenienza a seguirli nel loro avventurismo post-sovietico, aggressivo e violento, soprattutto nei confronti del mondo arabo-musulmano, se non altro perché noi—e l'Italia e la Spagna in particolare—questo mondo lo abbiamo sull'uscio di casa, per non parlare dell'immigrazione, e non a diecimila chilometri di distanza.

In Europa Francia, Germania e Spagna sembrano essere consapevoli che è venuta l'ora, peraltro suonata con molto ritardo, di prendere le distanze dagli Stati Uniti. Particolarmente interessante è il neo-leader spagnolo, Luis Rodriguez Zapatero. Per una questione generazionale—è poco più che quarantenne—è lontano da una serie di condizionamenti psicologici riguardanti fatti di più di mezzo secolo fa (gli americani intesi come 'liberatori', la Shoah, l'eterno ricatto morale sullo sterminio degli ebrei ad opera dei nazisti, eccetera) che bloccano ancora i leader europei più anziani. Zapatero non ha solo ritirato immediatamente le truppe spagnole dallo scenario iracheno, ma subito dopo la sua elezione ha rilasciato dichiarazioni molto significative. Alla domanda di come sarebbero state le relazioni della Spagna con gli Stati Uniti ha risposto: "Cordiali, come con tutti gli altri Paesi del mondo". Una risposta ovvia in un mondo normale, una bestemmia in chiesa in un contesto internazionale dove molti Paesi occidentali fra cui in primis l'Italia dell'inguaribile premier Berlusconi, fanno a gara per strusciarsi lascivamente all' 'amico Bush'. E Zapatero ha poi aggiunto: "Rafforzeremo i meravigliosi rapporti che abbiamo con Germania e Francia". È evidente l'intenzione del premier spagnolo di lavorare per un'Europa militarmente unita e forte che possa costituire un contraltare all'Impero americano.

Ma non credo che basti un'Europa forte e unita. Perché se rimarranno in piedi, per esempio, strutture come la NATO, rimarrà sempre in una posizione subordinata rispetto agli Stati Uniti.

È necessario andare molto più a fondo. La mia formula è, da tempo, la seguente: un'Europa unita, neutrale, armata, nucleare ed autarchica. Armata e nucleare non per aggredire alcuno, ma per sottrarsi definitivamente alla pelosa tutela militare americana, che è poi la preconditione della liquidazione della NATO e della neutralità.

Ma la parola chiave della mia formula è l'ultima: *autarchica*. Un'Europa liberata semplicemente dalla sudditanza americana non sfuggirebbe infatti ai costi della globalizzazione se rimanesse integrata a pieno titolo nel libero mercato mondiale e quindi cambierebbe la nostra posizione politica ma non muterebbe di una virgola la nostra 'way of life' che resterebbe americanizzante e modernizzante.

L'Europa ha popolazione, mercato, risorse e know how sufficienti per fare da sé. Ciò ci consentirebbe di sfuggire alla conseguenze più devastanti della globalizzazione. Continuando infatti sulla strada della competizione mondiale, vale a dire della competizione spietata di tutti contro tutti, perché questa è in estrema sintesi la globalizzazione, se in Cina pagano la gente con un pugno di riso anche noi europei dovremo adeguarci, se negli Stati Uniti non hanno *welfare* dovremo smantellare il nostro, come del resto sta già avvenendo. E così via.

E questo che noi europei, e anche voi giapponesi, vogliamo? Vogliamo che la nostra vita naufraghi in una fatica senza senso, che arricchisce le Nazioni ma impoverisce i popoli, dove il nostro tempo ci sia totalmente sottratto, assorbito dall'economia, sia quando siamo nella posizione di produttori sottopagati che in quella di consumatori eterodiretti, perché gli Stati possano *competere* mondialmente? Competiamo di meno. In un raggio più limitato. Naturalmente l'autarchia europea avrebbe dei prezzi. Molti prodotti diverrebbero inaccessibili e la ricchezza complessiva dei Paesi europei diminuirebbe di qualcosa. Ma noi non abbiamo bisogno di ingurgitare ancora prodotti—ne abbiamo già fin sopra i capelli—né di aumentare ancora la nostra ricchezza come Nazioni, dobbiamo semmai distribuire meglio questa ricchezza o quella che rimarrebbe. Abbiamo al contrario l'urgenza di dimagrire, e parecchio, di tornare a una vita meno competitiva, più semplice, più sana, più serena e più umana. Dovrebbe ormai essere chiaro a tutti che il processo di modernizzazione e di globalizzazione iniziato con la Rivoluzione industriale, partita dall'Inghilterra a metà del secolo XVIII, lungi dal migliorare la qualità della nostra vita, come abbiamo a lungo sperato, ma dubbi erano già sorti, almeno in Europa, negli Anni Trenta, l'ha peggiorata, sostituendo la fatica fisica dell'era preindustriale con la nevrosi, la depressione, la frustrazione, l'anomia, la sensazione dello scacco esistenziale e, soprattutto, una formidabile perdita di senso. Il benessere si è rivelato uno straordinario malessere. E dovrebbe far meditare quanto avviene attualmente in Cina che fotografa, in tempi strettissimi, quanto è avvenuto in Europa e in Occidente in maniera più diluita. Da quando è cominciato il 'miracolo economico' cinese, con l'adesione al libero mercato ed al modello di sviluppo occidentale, i suicidi sono diventata la prima causa di morte fra i giovani cinesi (250 mila l'anno, più tre milioni e passa di tentati suicidi) e la terza tra gli adulti.

Ma questa idea dell'autarchia se non è proprio solo un mio *wishfull thinking* è comunque di estrema nicchia in Europa. Il mito della modernizzazione, l'adesione all'attuale modello di sviluppo, all'illusione delle crescite infinite, resta, contro ogni evidenza, inattaccabile. Del resto Destra e Sinistra, liberalismo e marxismo sono

entrambi figli della Rivoluzione industriale e dell'Illuminismo, sono nati con la Modernità e nella Modernità si sono affermati, non possono quindi metterla in discussione senza recidere le proprie radici. E il 'pensiero unico' oggi imperante risiede proprio in questa inscalfittibile fiducia che Destra e Sinistra, liberalismo e marxismo, categorie peraltro vecchie di due secoli e non più in grado di comprendere le esigenze dell'uomo d'oggi, hanno nella Modernità e nel Progresso. Ma questo è un discorso che ci porterebbe molto lontano, sicuramente lontano dai temi di questa conferenza.

Credo quindi che dal punto di vista del modello di sviluppo, della modernizzazione, della globalizzazione non cambierà niente qualsiasi sia la posizione politica che assumeranno in futuro l'Europa, la Cina ed il Giappone.

Credo invece possibile, uno scenario diverso, e abbastanza apocalittico, dal punto di vista politico, conseguenza di alcune radicali trasformazioni del diritto internazionale che le leadership occidentali hanno operato in questi anni per adattarlo ai propri comodi. "Quos vult perdere, Deus dementat", gli Dei fanno impazzire coloro che vogliono perdere, dicevano i latini. È la sindrome da cui sembrano presi gli occidentali, senza rilevanti distinzioni tra americani e europei che, nella loro smania di predominio su ogni cultura 'altra', su ogni 'diversità' che intralci il loro cammino, non riescono a vedere al di là del proprio naso e a valutare le conseguenze profonde delle loro iniziative. Nel 1999, quando non era in atto alcuna guerra al terrorismo e l'11 settembre era di là da venire, gli americani e altri paesi della NATO, fra cui l'Italia nel poco dignitoso ruolo del 'palo', attaccarono la Jugoslavia che era alle prese con un grave problema interno, l'indipendentismo kosovaro. Lo fecero contro la volontà dell'ONU, in barba allo stesso statuto del Patto Atlantico (che è un'alleanza difensiva, mentre la Jugoslavia di Milosevic non minacciava alcun Paese NATO, anzi non minacciava nessuno) e, soprattutto violando il principio di diritto internazionale, fino ad allora mai messo in discussione, della non ingerenza militare negli affari interni di uno Stato sovrano.

In Kosovo le truppe paramilitari serbe, in un anno e mezzo di guerriglia, si erano rese responsabili, in due distinti episodi, dell'uccisione di 205 civili e sempre che fossero realmente tali perché, come si vede ogni giorno in Palestina, in una guerra di guerriglia non è facile distinguere chi è combattente da chi non lo è. In ogni caso niente di neanche lontanamente paragonabile a ciò che avviene quotidianamente in Cecenia per mano dei russi o nella stessa Palestina. Né è trascurabile il fatto che gli indipendentisti albanesi, come sempre avviene nelle lotte di liberazione contro eserciti regolari, facessero uso sistematico del terrorismo, armati ed incoraggiati in ciò dagli americani.

Ma il punto non è però questo. Ma il fatto che l'attacco alla Jugoslavia, come poi quello successivo all'Iraq, avveniva sulla base di una nuova concezione del diritto internazionale, una concezione globalizzante, secondo la quale esistono valori etici 'universali', 'diritti umani' e 'naturalisti' sovranazionali superiori a quello dell'intangibilità della sovranità nazionale. Se in un Paese questi valori etici universali vengono violati i Paesi che appartengono a una cultura 'superiore', cioè quelli occidentali, hanno il diritto, anzi il dovere, di intervenire con la forza.

Bene. Gli occidentali non si sono resi conto che in questo modo non abbatteranno solo il principio dell'intangibilità della sovranità nazionale ma anche quello dell'appartenenza nazionale. Se infatti esistono valori sovranazionali

zionali piú forti della sovranità nazionale, io non ho piú l'obbligo morale di schierarmi sempre e comunque con il mio Paese, come era fino a ieri ("Right or wrong, my country") se ritengo che stia calpestando valori etici universali. E mentre l'appartenenza nazionale è univoca (io sono italiano o non lo sono, sono giapponese o non lo sono) i valori ritenuti 'universali' sono opinabili. Anche all'interno di una stessa cultura o dello stesso Paese, ciò che è 'universale' per l'uno può non esserlo per un altro o comunque possono esserci gerarchie diverse per cui certi valori sono 'piú universali' di altri. Così, per rifarci alla situazione irachena, ci sono occidentali che ritengono la difesa dei 'diritti umani' violati da un dittatore un valore 'universale' talmente indiscutibile da legittimare la guerra, l'invasione e l'occupazione di un Paese, mentre per altri occidentali è piú indiscutibile il diritto naturale ed elementare di opporsi a una occupazione straniera, comunque motivata. Il conflitto non è piú fra Stati, ma fra universalismi diversi. E quindi il conflitto diventa, o ridiventa, ideologico e trasversale, passa all'interno dei singoli Paesi, come ai tempi dell'internazionalismo proletario che considerava gli interessi del comunismo mondiale superiori e quelli nazionali e difendeva i primi a danno dei secondi.

Allo stesso modo l'universalizzazione dei valori etici porta a una globalizzazione trasversale dei conflitti che provoca una spaccatura verticale all'interno dei vari Paesi e delle varie culture, ma soprattutto dentro il mondo occidentale. Per esempio in Italia c'è chi è con i nostri soldati in Iraq e c'è chi è con gli insorti iracheni *contro* i nostri soldati in Iraq.

Per ora lo scontro fra occidentali che si schierano dietro principi 'universali' diversi o addirittura opposti è solo concettuale e politico, e rimane sotto controllo, ma se la globalizzazione dei diritti si espande ulteriormente insieme all'irrigidirsi e all'incrudirsi della situazione, potrebbe diventare anche violento. Si potrebbero vedere italiani (e francesi e tedeschi e americani) che sciolti dall'obbligo morale di lealtà nei confronti del proprio Paese e dei propri concittadini, si battono l'un contro l'altro in nome di un obbligo morale superiore verso principi, valori, diritti 'universali' che trascendono il primo.

Insomma gli occidentali, abbattendo il principio dell'intangibilità della sovranità nazionale, e, con esso, quello dell'appartenenza nazionale, hanno posto le premesse per il possibile scatenamento, al proprio interno, di una guerra civile trasversale e planetaria.

[Public Lectures]

Americanism and Anti-Americanism

— The Role of Europe —

Massimo FINI

In March 1931, after a short stay in the United States, Paul Hazard wrote: “Returning to Paris, I find that it has become fashionable to denigrate America, whereas three or four years ago it was fashionable to praise it beyond measure.”¹⁾

Until then no one had questioned the American Dream. It was the dream of the “young America”, a legendary land of liberty, equality, work and easy money, of opportunity, of personal achievement and the promise of success for everyone, of affluence, modern conveniences, bathrooms and electrical household appliances in every home, of widespread ownership of automobiles and the miracles of technology. It was a legend symbolised above all by the skyscrapers which, not yet in vogue in the Old Continent, had an immense impact on the European collective imagination. The enormous appeal of the American dream was demonstrated by the huge numbers of emigrants—above all Italians and Irish—who left Europe in their hundreds of thousands, millions even, their belongings packed into cardboard suitcases.

By the early thirties that dream and legend was beginning to tarnish. There were essentially two reasons for this. One was the Stock Market Crash of 1929, a particularly alarming occurrence in a country that had invested everything—or almost everything—in the economy and was faltering in precisely that area. The other, deeper reason, was rooted in the “culture of crisis” which, first announced by Friedrich Nietzsche in the second half of the nineteenth century, was spreading rapidly in Europe in the wake of the First World War and the discovery of the ambivalence of technology (the war had caused unprecedented numbers of casualties precisely because of the enormous destructive potential of the new technological weapons and the disastrous “frontal attack” theories of men like Haig and Cadorna). It was a culture that had found its most important expression in Oswald Spengler’s highly successful work *The Decline of the West* (1918–1922). There was nothing coincidental about the fact that Spengler’s point of departure was Heraclitus, who, like Hesiod, had a pessimistic vision of the historical process and believed that humanity’s destiny was one of constant degeneration.

The conception of Progress and Modernity was suffering a crisis of confidence, and this extended to America, the country that most clearly embodied that Progress and Modernity.

While Johan Huizinga noted how quickly the word “*progress*” had vanished from the lips of philosophers, historians and ordinary people in Europe after the end of the First World War,²⁾ Progress and Modernity remained the guiding light of American society, whose optimism had not been weakened even by the 1929 stock market

¹⁾ Paul Hazard, *Un collège de jeunes filles en Amérique*, Paris, 1931, p. 110.

²⁾ Johan Huizinga, *La crisi della civiltà* (The Crisis of Civilisation), Torino, 1962, p. 4.

crash.

It was at this point, in the early 1930s, that what we refer to as *anti-Americanism* first appeared. But it was not a political form of anti-Americanism. Ever since the United States had earned a say in European affairs through its involvement in the Great War, criticisms of US policy had in reality been very bland and were limited to Wilsonism and its fourteen points, humanitarian democratism, and American pacifism (“quam mutatus ab illo!”). But anti-Americanism was not, or was not entirely, a result of the emergence of European fascism. This would be the case later on, but when anti-Americanism first appeared Hitler had not yet come to power (he would not do so until 1933) and Italian fascism had an ambivalent attitude towards America. As a democracy, as indeed the first and largest democracy in the world, America was without question an enemy power. But at the same time it was a “young people” with a certain affinity to the Italian nation, a nation that Mussolini’s regime claimed to have reinvigorated and brought back to life through its Revolution. Moreover, there was great interest within the fascist movement in the “new art” of cinema. And the cinema, along with the skyscrapers, was one of the symbols of America.

The son of Mussolini, Vittorio observed that “the public now has a liking for American cinema”, noting that this was quite justified considering the tediousness of German cinema and the frivolity and old-fashioned style of French cinema. And he wrote: “America is young whereas Europe is antiquated, and this affects the public even in simple things like entertainment ... the American public is drawn to the childlike yet happy sense of adventure, and if this youthfulness derives from not having centuries of history and culture, of systems and philosophical laws, then it is certainly much closer to that of our bold generation than the non-existent youthfulness of many countries in Europe.” He concluded by comparing the conservative nature of European cinema with the constantly innovative character of American cinema.³⁾

So the original anti-Americanism, the anti-Americanism that was emerging in the early 1930s, did not stem from fascism but from a sentiment shared throughout Europe, whether in France, Germany or Britain. It had nothing to do with the policies of the United States, but rather with American values and way of life.

What was now being criticised in America was exactly the thing that had been so admired just a few years earlier: the pervasive technology that tended to standardise everything, comfort as a form of weakness, the myth of success at all costs, easy money, progress seen in purely materialistic terms, senseless, obsessive activity, the predominance of economics over human beings, and the loss of all traditions and values.

Europe, which had previously shown unreserved admiration for the United States, was now waking up to the danger of Americanisation. This danger was already very real because Americanisation meant modernisation, a process that was very hard to withstand. In the face of advancing Americanisation/modernisation, Europe sought to redefine a specific identity that would allow it to avoid the loss of its culture and traditions, its lifestyles and values, and ultimately its soul. Europe did not yet identify with the United States and began to view it as a degenerate son that had taken to their extreme consequences certain principles that had been first established by

³⁾ Vittorio Mussolini, *Emancipazione del cinema italiano*, in “Cinema”, 25/9/1936, p. 213.

European culture and history during the Industrial Revolution and subsequently rationalised through Illuminism. At any rate Europe was unwilling to admit its identification with America. The all-inclusive and unique concept of West did not yet exist. America was seen as the “Far West” in the sense that it was something separate and different from Europe.

But Europe was afraid of the growing influence of American culture and the threat of Europeans adapting to the American lifestyle. The cinema of Hollywood, which had initially been admired and had succeeded in invading European markets and cinema halls as a result of its technical superiority, was now seen as a formidable propaganda weapon for American values, indeed the most effective tool of a relentlessly advancing colonisation. According to Leo Longanesi,⁴⁾ a leading Italian intellectual of the period, “American cinematography is nothing but technique”, but through this technique it was introducing into the old Europe the seeds of superficiality, childishness, falsity, the “happy ending” and the absence of the tragic sense of existence that had always been part of European culture. In cinema, as elsewhere, technology may in fact be more a danger than a benefit. And the cinema was itself used to attack the mass culture epitomised by America. This led to a preference for Soviet cinema (with films such as the notorious *Battleship Potyomkin*), which although equally blatantly propagandistic was at least not vacuous like American cinema because “it sought instead to make the viewer more intelligent, more thoughtful, more critical”.⁵⁾ This view, expressed in 1934 by the Italian critic Corrado Sofia, was widely shared by the European intellectual elite of the times and was bolstered by the advance of antidemocratic totalitarianisms.

And in the meantime Europe was looking around for a potential model of modernisation that would allow it to avoid shedding its culture, traditions and past and become like America, which had no past.

Europe looked to Japan, which like America was also viewed ambivalently. On the one hand it represented the “yellow peril” that was becoming reality (in European and western nightmares there is always a “yellow peril”: now it is China) because it was mastering the technologies and organisational models supplied by the West, copying them, improving them, perfecting them, and invading our markets. On the other hand, behind this superficial Americanisation and modernisation, Japan had maintained its ancient and almost archaic traditions, a rigid social hierarchy, a samurai-like sense of discipline applied to factories (at least from the European standpoint in the 1930s). Japan was therefore seen as an example to follow if Europe wanted to modernise without becoming Americanised, without losing its traditions, its past and ultimately its identity.

As the war approached, anti-Americanism in Europe became more virulent, incited naturally by the fascist dictatorships. America was no longer seen as merely the country of uniformity, superficiality and falsity, but also as the country where enormous social inequality lurked behind the façade of equality (racial discrimination apart). A small number of rich and extremely rich were surrounded by a sea of poverty. It was the country where workers had no protection, where democracy was a sham, a façade legitimising the enormous business interests of the corporations. Last but not least, it was the country of gangsters, bandits and violence.

The American myth was to return to vogue after victory in the Second World War. But although the

⁴⁾ Leo Longanesi, *L'Italiano*, Numero Speciale, January/February 1933.

⁵⁾ Corrado Sofia, *Il cinematografo affare di Stato*, in “Critica fascista”, 1/4/34, p. 39.

Americans were bathed in a triumphal glow by having saved the Old Continent from the barbarism of the Nazis, their culture was still having difficulty in making headway. I remember in the 1950s when something kitsch arrived in Italy from the United States—as often happened—we referred to it good-naturedly but derogatively as an “*americanata*”, in other words, something extravagantly tasteless. Because although Italy was still a largely rural country—or perhaps for this very reason—we still had our own identity and the critical tools needed to judge the things that were arriving from outside. We had not yet caught the craze of the grandiose, the enormous, the immense. Whenever we saw a *Cadillac* or an *Oldsmobile* stuck in the narrow streets of our old city centres, we would smile to ourselves thinking that a *Vespa* was far more practical.

Now things have changed, both in Italy and in the rest of Europe. We accept everything that arrives from America with open arms: products, cinema, TV programmes (the television has now replaced the cinema as the ultimate propaganda tool), and even indigestible historical blockbusters about ancient Rome that we once would have ridiculed for their complete ignorance of our history (one example is Ridley Scott’s *The Gladiator*). Americanisation—or rather modernisation, spearheaded by the United States—now reigns supreme, standardising everything. It is curious how this process of standardisation established itself once and for all in the 1970s, the years of the Marxist-Leninist student demonstrations against the “system” and America. The young people filled the squares, fought with the police, chanted slogans such as “Yankee go home!” and “Nixon murderer!” (incidentally, the best president the United States has had since the Second World War), then returned to their comfortable houses with bathrooms and electrical appliances. And in the meantime the Americans were establishing new military bases in Germany, Italy and elsewhere in Europe as a defence against the Soviets.

Today there is no difference between the American and European ways of life. I remember how disappointed I was the first time I went to New York in the early 1980s. I felt I could have been in any large European city. It was only when I saw the famous *skyline* of skyscrapers reflected in a glass-concrete façade that I realised I really was in New York. The legendary New York has survived only in the collective imagination expressed in films and on television. It has remained identifiable only through the virtual media.

As for modern conveniences, which in the 1930s were one of the major differences between America and Europe, many countries—not only in the West—have now overtaken the United States. To see this, it is sufficient to look at the Narita airport in Tokyo or those of Frankfurt and Amsterdam, which are clean, functional and efficient, and then land at John Fitzgerald Kennedy in New York, which is filthy, crumbling, slow and inconvenient, and where something or other is always out of order, the escalators for example.

The American and European ways of life are identical because they follow exactly the same development model: industrial, monetary, financial, based on the production-consumption mechanism (which has inverted the terms of the issue: we as westerners today no longer produce to consume, we consume to produce and sometimes we don’t even consume at all, we simply produce for the sake of producing), on the creation of new and insidious needs (based as it is on exponential growth, the model requires needs and therefore creates them), on advertising to persuade consumers of the urgency of these needs, and on the TV—conveniently installed in our homes—as the vehicle of this compulsive, consumeristic obsession.

If the term “West” means adoption of this development model, then today it no longer applies purely to Europe and the United States. Instead, it can legitimately be applied to all industrialised countries, including Japan, Russia and China. And if there still remain native cultures, traditions and mentalities in any of these originally non-Western countries, then they are destined to be swept away over time by the expansion and violence not only of Americanisation—which is only one, albeit important, aspect—but by modernisation and globalisation, which are the crux of the matter.

The complete alignment of Europe with the American modernising and progressive development model is also attributable to the domination of the Judeo-Christian school of thought in the Old Continent. The modern idea of progress was extraneous not only to the ancient Eastern and Middle Eastern civilisations, but also to the Classical cultures of Europe, namely the Greek and Latin cultures. These cultures lived first and foremost in the present, they were essentially *ahistorical*. The Judeo-Christian tradition introduced an entirely new element by postulating an end towards which the entire historical process was directed, namely the fulfilment of God’s plan through human history. This laid the foundations for the teleological and progressive conception of history. This teleology was subsequently developed by Illuminism on a worldly rather than religious, yet even more optimistic, basis. “History,” wrote Edward H. Carr, “was conceived in terms of progressive evolution with as its goal the best possible conditions for man on the earth”.⁶⁾ Hegel and Marx identified the end and the means for attaining this end. For both, the end was the attainment of liberty; for Hegel, the means was the modern state, for Marx the classless society. For the liberal democracy that today reigns supreme and unites end and means, the end of history is, tautologically, democracy itself. Which of course is none other than the façade that hides the real substance: industrialism and capitalist economics, given that Marxism, the other face of Illuminism and Modernity, has proved to be an inefficient form of industrialism and therefore destined for failure. Indeed, the supreme values of this system, to use the words of US President George W. Bush, are “freedom, democracy and *free enterprise*”. This industrialistic and secular progressivism, this extreme form of optimistic historicism, has created a universalistic determinism that is expressed effectively in the words of American political economist Francis Fukuyama, who believes in the existence of a *Universal history of humanity*, valid for all peoples of the world, who inevitably and inexorably will be led, by the rigorous logic of this finalistic design, towards “the Promised Land of democracy”, the “diffusion of a general consumer culture” and “technology-based capitalism”.⁷⁾ And this is effectively what has happened up to now. But it is not what will always happen, in spite of Fukuyama and indeed all the Fukuyamas and Bushes of this world. Because the exponential growth on which the current development model is founded may exist in mathematics, but it does not exist in nature. And when it no longer has the opportunity to expand—a time that may be closer than we think—the model will collapse in upon itself, just as all totalitarian systems have always done. A good example is the Roman Empire, which just as it had finished conquering the whole of the known world, fractured into a thousand pieces to create European feudalism.

Greek culture, which in spite of being the cornerstone of European civilisation was supplanted in Europe by

⁶⁾ Edward H. Carr, *Sei Lezioni sulla Storia*, Torino, 1967, p. 118.

⁷⁾ Francis Fukuyama, *The End of History and the Last Man*, The Free Press, 1992.

the finalistic and progressivistic Judeo-Christian school of thought, might have helped us as it did not believe in the finality of history and above all, through various myths, cultivated a sense of limit and measure (the Oracle of Delphi bore the inscription “Nothing in excess”). In other words it encapsulated the tragic sense of existence which, according to a number of European intellectuals of the 1930s, was lacking in the Americans and which today we in the West, whether or not Americans, have lost, leading us into the dead-end of unlimited progress. And this, besides shedding the blood of peoples and nations, will inevitably prove catastrophic.

So unlike in the 1930s, we Europeans are unable to criticise the American way of life today for the simple reason that it is also our way of life and that the model of economic, technological and scientific development is the same throughout the industrialised world. This is what is known as *globalisation*, which in the ruthless economic struggle that embroils every country in the world, forces everyone to adapt and fall into line. The few differences that still remain between Europe and the United States and the rest of the industrialised world are destined to be gradually eliminated. In Germany, in order to be competitive, they are dismantling the so-called “Rhine model” and reducing the welfare system to a bare minimum. Some large companies such as Volkswagen, have already increased working hours without raising workers’ salaries. As globalisation advances, all the other European countries will have to keep pace.

So the criticisms that Europe makes of America no longer concern the way of life: the economicism, materialism, etc., in which we are all implicated are no longer related to the existential sphere. Instead they are political criticisms, criticisms of the United States’ foreign policies, which have taken a highly adventurist and exceedingly dangerous course not since September 11, 2001 but since 1989 and the fall of the Soviet Union. In Europe, voicing such criticisms is sufficient to be labelled *anti-American*. I reject this conceptual terrorism. If for example someone criticises the foreign policy of Madagascar, that does not necessarily make him anti-Madagascan. He is simply criticising a country’s policy. Likewise, it must be permissible for someone to criticise the American government (or indeed any other government in the world) without being labelled anti-American for doing so. And although we certainly find anti-American prejudices in Europe, we also find a pro-Americanism that is so subservient to the interests of the United States, which are not necessarily compatible with our own, as to be considered anti-national and almost subversive (in reality this tendency is much more widespread among the political and intellectual leaders than amongst the general population).

After 1989 and the collapse of the United State’s historical adversary, the Soviet Union, American foreign policy became steadily more aggressive. The most alarming aspect of this was not just the wars that the United States subsequently embarked on—while initially using other names to describe them (“international police mission”, “humanitarian intervention”, “peace-keeping operation”)—but the ideology that lies behind them: the Americans’ conviction that they represent “Good”, which they have a messianic mission to export everywhere, by whatever means necessary. The Americans have always seen themselves as morally superior to other nations, although it is hard to understand exactly why, considering that their history was founded on the ruthless genocide of the native Indians and that the United States was for a long period of time the only modern state to practise

slavery, which in Europe had disappeared since Roman times (the “serfs” were peasants bound to the feudal lord’s land, which was also *their* land and from which they could neither move away nor be evicted, but at least they were not slaves). This conviction found its historical and juridical endorsement at the Nuremberg and Tokyo trials, where for the first time in history, the victors tried the leaders of the defeated instead of simply executing them—with honesty and without hypocrisy—as had previously been the practice. This is a juridical aberration that brings together law and force: the force of the victor. Now, it had taken thousands of years of legal history to establish precisely the opposite: the supremacy of the force of law over the law of force.

This Manichaeic distinction between Good and Evil is particularly strong in the United States but is not an exclusively American characteristic. Instead it belongs to the whole of the western world and indeed, as we shall see below, has its roots in Europe.

And ultimately, Osama Bin Laden, or others on his behalf, is none other than the “shadow” of the West, a fundamentalist, totalitarian response to a West which, in spite of defining itself as—and indeed sincerely believing itself to be—democratic and liberal, is in reality fundamentalist and totalitarian. Because it is unable to conceive of or tolerate that which is “different from itself”, which in one way or another must be brought into line with the dominant western model that sees itself, to quote Voltaire’s *Candide*, “the best of all possible worlds”. And if our model is the best, why not export it and, when necessary, impose it on others, thus saving Safia and all possible Safias in the world, or rather in the Third World? The West appears to be condemned to a fatal reversal of the phrase that Goethe put into the mouth of Mephistopheles in *Faust*: “I am part of that spirit which eternally wills evil yet eternally works good”. The paradox of the West is to believe itself Good, to eternally will good, and yet, in a kind of heterogenesis of ends, to eternally work Evil. And the underlying fallacy is precisely this Manichaeic distinction between Good and Evil and the Promethean claim to constantly further Good at the expense of Evil, to eradicate Evil from the face of the earth, without realising that in reality Good and Evil are the two sides of the same coin and are inextricable intertwined: the greater the Good, the greater will be the Evil. Applying this abstract concept to our times, the stronger the will in the West to make the whole of existence conform to it, the greater will be the response from international terrorism.

The totalitarian corruption of the West, this desire for universal conformity and “*reductio ad unum*”, this obscure vice that has accompanied it throughout almost its entire history, originated in the remote past in Europe. This too is a paradox because it was Greek thought, the very cornerstone of European civilisation, that was the first to acknowledge the right to existence and the dignity of “others”, those who are different from ourselves. When Thucydides spoke of the Persians, he described them as “barbarians”, as having strange lifestyles and bizarre customs which were incomprehensible to him, but he would never have dreamed of imposing Greek culture on the Persians. The Greeks were one thing and the Persians another.

With the advent of Christianity things changed radically. In *evangelisation*, in other words the urgency not only to announce the “good news” to one’s neighbour but also to convert him to the faith, we already find, at least in *embryonic form*, the ambition of *reductio ad unum*, the desire to make everything that is different conform to oneself. This concept was later to develop through eurocentrism; through classical colonialism with its distinction

between “superior” and “inferior” cultures and the duty of the former to bring civilisation, whether secular or religious, to the latter; through Illuminism, with the absolutisation of the Goddess of Reason and the truly globalistic conception of man as a “world citizen”, through proletarian internationalism of Marxist origin (Leon Trotsky’s concept of “permanent revolution”). And ultimately it finds its complete realisation in the reigning model of economic and industrial development championed by the United States. This model has succeeded, or is succeeding, in achieving what Christianity, classic colonialism and Marxism-Leninism had merely attempted: domination of the entire planet. In this universalistic design, the United States and Europe were for a long time united by the same culture of evangelisation, by the conviction of belonging to a superior culture and of having created the best model of society, although it is the United States that has carried it through with the greatest force, convinced that this will enable it not only to maintain its imperial hegemony but also to complete it, keeping Europe in the subservient position into which it had fallen after its substantial defeat in the Second World War.

The United States and Europe took part together, both materially and ideologically, in all the “humanitarian interventions” conducted during the last decade of the twentieth century, interfering militarily in other peoples’ conflicts, denying them the basic right to write their own history—through war if necessary—without the self-serving interventions of outside forces. We saw this in the Iraq-Iran war, in Somalia, in Bosnia and in Kosovo, where the verdict of the battlefield was overturned.

The intervention in the Iraq-Iran war was particularly serious and significant because it demonstrates that “humanitarian interventions”, even when carried out with the best intentions and not with some hidden agenda (as in reality has almost always been the case, both in that war and subsequently in the wars in Bosnia, Kosovo, Afghanistan and Iraq), create worse problems than those they purportedly aim to prevent.

In 1980 it was Iraq that attacked Iran, banking on the fact that the overthrow of the Shah by the Khomeinist revolution would have weakened the country. After five years of bloody warfare in which the Americans, Europeans and Soviets had been primarily concerned with supplying arms to the two sides so that they could slaughter each other more effectively (“pecunia non olet”), Khomeini’s army of basij, ragged volunteers and children, a real “army of the people” to use von Clausewitz’s expression, had worked a miracle: they were at the gates of Bassora and were poised to take the city. This would have resulted in the immediate downfall of Saddam Hussein (the “impresario of crime” as Khomeini called him), the unification of Shiite Iraq with Iran (they are the same people), independence for the Iraqi Kurds, and overall a more rational structure for the region than the one established so arbitrarily and unfeasibly by the British when they created the state of Iraq in the early 1930s. But the westerners, led by the Americans, began to cry that the “Iranian hordes” must not be allowed to enter Bassora. It would be a massacre, they claimed, a slaughter, a genocide. All supplies to Iran were cut off, while Saddam was plied with weapons, including the infamous “weapons of mass destruction” which would later serve as a pretext for the 2003 war. “Advisors” from the Pentagon arrived in aid of Saddam, along with the logistics and air power of the U.S. Force, while American warships set off across the Gulf in search of an incident that would allow them to intervene more directly. In the end, it came when an American ship was struck by a missile. In spite of the fact

that the missile was fired by the Iraqis and manufactured by the French, the responsibility was attributed to the Iranians, allowing the Americans to legitimise retaliatory action. In 1988, Iran was forced to sign a peace treaty, robbing it of a sacrosanct victory won on the battlefield.

The result of the “humanitarian intervention” was that instead of ending in 1985 as it should have done, the war had dragged on three years longer. Instead of 500 thousand dead, the number of victims was a million and a half. And all this blood had been shed pointlessly on either side, because if war has ever had a purpose it is that of resolving a conflict once and for all (or at least for a long period of time), while that externally imposed peace had left the same old regional tensions in place. If anything it had aggravated them and instead of being wiped off the face of the earth as he fully deserved, Saddam found himself awash with highly sophisticated weaponry, which he inevitably unleashed on Kuwait the following year. This prompted the first Gulf war, where, under the lights and fireworks shown to us by the splendid Peter Arnett, the American “smart bombs” and “surgical strikes” killed 160 thousand civilians, including 32,195 children, who are children just like our own.

In short, in the name of peace the Americans interfered in other peoples’ wars, branding them as “absurd”, “barbaric”, “uncivilised”, “intolerable” and “unacceptable”, as if those peoples did not have the right to protect their interests and their values. The West, led by the United States, declared war on war and invented “peace-keeping operations”.

But on September 11, 2001 the Americans were attacked on their own soil for the first time in their history, and in spite of the modest toll of victims—not even remotely comparable to the damage that Americans had inflicted on other countries over a period of fifty years through their coups and unmotivated attacks (the American writer Gore Vidal has calculated 250 unprovoked attacks made by the United States), not counting the collateral damage of their “humanitarian interventions”—the scenario changed dramatically. After decades of being repudiated, war suddenly became necessary, urgent, unavoidable, sacrosanct—even holy. And the right that they had denied to the Iranians, the Iraqis, the Somalis, the Serbs, Croats and Bosnian Muslims, the Americans now claimed for themselves. War was “absurd”, apparently, only when waged by others. The United States President, George W. Bush, elaborated the theory of “preventive war”, a theory that no one in the thousands of years of human history had ever dared propose openly, not even Hitler, not even—going back further in time—the Roman Empire, the most expansionist, aggressive and warmongering power in the ancient world, because “*si vis pacem para bellum*” fell short of the concept of “preventive war”. Indeed, “preventive war” equates to a state of permanent war if it is triggered not by a hostile act but the mere suspicion of one.

But the American president went even further. In a report submitted to Congress in September 2002 announcing the theory of “preventive war”, Bush wrote: “The President has no intention of allowing any foreign power to catch up with the huge lead the United States has opened in armaments”. Note: *any foreign power*, which also means the European allies. This was the first time in history that a country had demanded that everyone else disarm unilaterally, thereby laying the foundations for an everlasting, eternal hegemony, reminiscent of but going even further than the delusions of omnipotence of Adolf Hitler with his “Thousand Year Reich”.

After this premise of an unprecedented and unsurpassed aggression, Bush sought to reassure the world by

claiming that “America will use its power not for its sole benefit but for the good of free societies”. The other countries have to take this on trust. Besides, if America represents Good, how can it possibly work Evil? The document also promises “a battle of ideas and values for the future of the Islamic world”. In other words, the Islamic world will be accepted only to the extent that it steps into line with the West. The whole world will have to conform to a single model, that of America and the West. This document also says: “There is only one sustainable model: freedom, democracy, enterprise, values that must be defended everywhere”.

The ultimate objective is to establish, in fact, if not by right, a single world state ruled by the Americans, a single world government led by the United States, a single world super-police consisting of the US and NATO military forces, a single development model embracing the entire planet, a single world market and a single type of human being: the Great Consumer.

The Americans appear to have learned nothing from September 11, not even the symbolism of the World Trade Center. The attack itself was terrible, but was made even more devastating when the Twin Towers collapsed as a result of their inordinate height, their extremeness, the way they challenged the heavens. It is unwise to provoke the *phthónos theón*, the envy of the Gods, the Ancient Greeks would have said.

The tragedy of the World Trade Center could have and should been an opportunity for the Americans to reflect. All excess ultimately reaches its own limit and then collapses. At the rate at which the Americans are spreading the Western development model, which by its very nature must accelerate constantly, they are shortening the future of the system and consequently also their own future. But instead of slowing them down, the September 11 attacks gave further momentum to the Americans’ delusions of universal hegemony. They fail to understand that achieving their objective will also bring about their end. Because when a model based on exponential growth is no longer able to expand, having conquered everything that is conquerable, it will collapse upon itself. And the collapse of a system that has reached a global scale will trigger a global catastrophe. Paradoxically, it is Islamic terrorism that, by opposing this advance, is actually helping the Americans to avoid even more rapid self-destruction.

Economically, Europe is also implicated in this process. Modernisation, resisted in the 1930s by a few members of the Old Continent’s intellectual elite who understood its inhumanity if not its catastrophic final destiny, has now been entirely embraced by the Europeans. No one in Europe questions Modernity any more: it is taken for granted and considered irreversible and beneficial.

The real battle is that of political hegemony: we risk leaving entirely in the hands of the Americans the illusory control of a train that is hurtling along on its own and no longer responds to the driver’s commands.

Over the past few years, more or less since the submission to Congress of the document referred to above and the Iraq war, Europe—or at least several European countries—have understood what they should have understood fifteen years ago: that our position with respect to our “American friend”, our American ally, has changed radically since the collapse of the USSR.

As long as the Soviet Union existed, our alliance with the United States was necessary because it was the only country to possess an adequate nuclear deterrent to dissuade the “Russian bear” from attempting military

ventures into Western Europe. So the mutual nuclear threat protected us too. In reality, not even this was entirely certain: in the mid 1980s, Ronald Reagan, in a moment of brutal frankness, distraction, drunkenness or the onset of Alzheimer's Disease, had suggested that Europe might be the arena of a "limited nuclear conflict". In other words, it was by no means certain that if the Soviets unleashed an atomic bomb on Paris, Bonn or Rome, the Americans would have fired nuclear missiles at Moscow, but might instead have targeted other Warsaw Pact countries. In short, the USA and the USSR would have conducted a nuclear war by proxy, as they had already done with conventional weapons on numerous occasions.

Yet in spite of such declarations by Reagan, up until 1989 in Europe we continued to believe that we were safe under the American nuclear umbrella.

Naturally the Americans exacted a high price for this defence—or purported defence—keeping European countries in a state of subjection and reduced national sovereignty. This was achieved first and foremost militarily—through NATO and the various extraterritorial US bases scattered all over the Old Continent—but was also political, economical and ultimately cultural.

Today Europe no longer requires the protection of the United States and has an obvious interest in breaking loose from a state of subjection for which it is still paying the price while no longer reaping the benefits. It is not in Europe's interests to be the "faithful" ally of the Americans as it has been for fifty years (only dogs are "faithful"), but neither is it in our interests to be an ally. Because the Americans are in reality our adversaries. This is most evident in the field of economics, where the Americans unscrupulously continue to exploit the advantage they gained through victory in the Second World War. But they are also our adversaries in the political arena. It is not in Europe's interests to follow the Americans in their post-Soviet adventurism, which is particularly aggressive and violent towards the Arab and Muslim world. If for no other reason than the fact that for us—Italy and Spain in particular—this world is on our doorstep (without considering the issue of immigration) and not ten thousand kilometres away.

Within Europe, France, Germany and Spain seem to have realised—and not a moment too soon—that the time has come to distance ourselves from the United States. One particularly interesting position is that of the new Spanish leader, Luis Rodriguez Zapatero. Because of generational factors (he is little over forty), he is unaffected by psychological conditioning deriving from events that took place more than half a century ago (the Americans seen as "liberators", the Shoah, the eternal moral blackmail associated with the extermination of the Jews by the Nazis, etc.) that still paralyses the older European leaders. Not only did Zapatero withdraw Spanish troops immediately from Iraq, he also made some highly significant declarations immediately after his election. To the question of what relations Spain would have with the United States, he replied: "Cordial, as with all countries in the world". This might be an obvious answer in a normal world, but was sheer blasphemy at a time when many western countries—first and foremost Italy with its dreadful premier Berlusconi—were scrambling over each other to curry favour with Bush. Zapatero went on to say: "We will strengthen the splendid ties we have with Germany and France". The Spanish premier was expressing a clear intention to work towards a politically united and strong Europe that would act as a counterweight to the American empire.

But I do not believe that a strong and united Europe is sufficient. Because so long as organisations such as NATO remain in existence, Europe will always be in a position of subordination with respect to the United States.

We must go much further than this. I have long been advocating the following formula: a neutral, armed, nuclear and autarchic Europe. Armed and nuclear not to attack anyone, but to escape once and for all from the self-serving American military protection as the prerequisite for liquidation of NATO and neutrality.

But the most crucial word in my formula is the last: *autarchic*. A Europe merely liberated from American subjection would continue to pay the price of globalisation if it remained fully integrated with the free world market. It would alter our political position but would do nothing to change our lifestyle, which would remain Americanised and modernised.

Europe has sufficient population, market, resources and know-how to survive on its own, allowing us to escape the most devastating consequences of globalisation. Continuing along the road of world economic competition, in other words the ruthless competition of everyone against everyone else—because this in the final analysis is what globalisation signifies (if in China people are paid a fistful of rice, then we Europeans must do likewise; if the United States does not have a *welfare* system, then we must dismantle our own, as in fact we can already see happening. And so on and so forth.

Is this what we Europeans and you Japanese really want? Do we want our lives to founder in senseless labour that enriches nations but impoverishes human beings, where our time is entirely taken away from us, absorbed by the economy, whether we are in the position of underpaid producers or manipulated consumers, so that States can *compete* on a world level?

Let us compete less. Over a more limited radius. Of course European autarchy would have a price. Many products would become inaccessible and the overall wealth of European countries would to a certain extent be reduced. But we have no need to consume even more products—we are already awash with them—or to increase our wealth as nations. If anything we need to distribute this wealth—or what would remain of it—more effectively. We urgently need to slim down, to return to a less competitive and simpler lifestyle, a way of living that is healthier, more peaceful and ultimately more human. It should now be clear to everyone that the process of modernisation and globalisation that began with the Industrial Revolution in England in the mid 18th century, far from improving the quality of our lives as we had long hoped (although in the 1930s some people had voiced doubts, at least in Europe) has actually made it worse, replacing the physical fatigue of the pre-industrial age with neuroses, depression, frustration, anomy, a feeling of existential failure and above all an enormous sense of meaninglessness. Affluence comes at a terrible price. We should reflect on what is currently happening in China, where the very same process that took place gradually in Europe and the West is being concentrated into an extremely short timeframe. Since the Chinese “economic miracle” began, when the country joined the free market and embraced the western model of development, suicide has become the major cause of death amongst young Chinese (250 thousand a year, plus three million or more attempted suicides) and the third most common cause amongst older people.

But this idea of autarchy, if not just *wishful thinking* on my part, is in any case an extreme niche in Europe.

The myth of modernisation, widespread support for the current development model, the illusion of indefinite growth, remains—against all the evidence—unassailable. In any case, Right and Left, Liberalism and Marxism are equally the offspring of the industrial revolution and Illuminism. They were born into Modernity and grew up in Modernity, so they are unable to question it without severing their own roots. And the single dominant school of thought is founded precisely on this unshakeable faith in Modernity and Progress on the part of Right and Left, Liberalism and Marxism—categories that are now two centuries old and no longer reflect the true needs of today's human beings. But this is taking us away from the subject of this conference.

I believe that from the standpoint of the model of development, of modernisation, of globalisation, nothing will change regardless of the political position that will be adopted in the future by Europe, China or Japan.

Instead I see a possible scenario, fairly apocalyptic in political terms and a consequence of the radical changes to international law that western leaders have made in recent years for their own convenience.

“Quos vult perdere, Deus dementat”: “Those whom God wishes to destroy, he first deprives of reason”, says the Latin proverb. And this is indeed the syndrome that appears to have taken hold of Westerners—without any significant distinction between Americans and Europeans—who, in their craving for dominion over every “other” culture, over every “diversity” that lies in their way, are unable to see beyond their noses and evaluate the deep consequences of their actions.

In 1999, prior to September 11 and the “war or terror”, the Americans and other countries in NATO (including Italy in the undignified role of “lookout”) attacked Yugoslavia, which was grappling with a grave domestic problem, that of Kosovan independence. This was done against the will of the UN, in defiance of the very articles of the Atlantic Treaty (which is a defensive alliance, while Milosevic's Yugoslavia was not threatening any NATO country, or any country at all for that matter), and above all in violation of the previously sacrosanct principle of international law that prohibits military interference in the domestic affairs of a sovereign state.

In Kosovo the Serbian paramilitary troops, in a year and a half of warfare, were responsible in two separate episodes for the killing of 205 civilians (assuming that they were in fact civilians, because as we see every day in Palestine, in a guerrilla war it is not easy to distinguish combatants from civilians). In any case it was nothing even remotely comparable to what the Russians are doing on a daily basis in Chechnya or what is happening in Palestine. We should also not forget that the Albanian independence fighters, as always happens in struggles of liberation against regular armies, made systematic use of terrorism, for which purpose they were armed and encouraged by the Americans.

But that is not the point. The point is that the attack on Yugoslavia, like the later attack on Iraq, was carried out on the basis of a new conception of international law, a globalising conception of the existence of “universal” ethical values, supranational “human rights” and “natural rights” that are higher than that of the inviolability of national sovereignty. If these universal ethical values are violated in a country, the countries that belong to a “superior” culture, namely those of the West, have the right, the duty even, to intervene with force.

However, what westerners failed to realise was that this would destroy not only the principle of inviolability of national sovereignty but also the sense of national belonging. If indeed there are supranational values higher

than that of national sovereignty, then I no longer have the moral duty to side with my country, as had previously been the case (“Right or wrong, my country”), if I believe that it is trampling on universal ethical values. And while national belonging is unique (either I am Italian or I am not, either I am Japanese or I am not), the values considered “universal” are a matter of opinion. Even within a given culture or country, what is universal for one person is not necessarily universal for another. Or in any case there may be different hierarchies whereby some people see certain values as “more universal” than others. So to return to the Iraq situation, there are westerners who believe that defending the “human rights” violated by a dictator is a “universal” value that is so incontrovertible as to justify war, invasion and occupation of a country, whereas others believe that the natural and elementary right to oppose a foreign occupation, whatever its motivation, is even more incontrovertible. The conflict here is not between states but between different universalisms. It is ideological and transversal, it cuts through the concept of state in the same way that proletarian internationalism considered the interests of world communism to be superior to national interests and defended the former at the expense of the latter.

In the same way, the universalisation of ethical values results in a transversal globalisation of conflicts which in turn creates a vertical fracture within the various countries and cultures, but above all within the western world. So in Italy for example, some people support our soldiers in Iraq while others support the Iraqi rebels *against* our soldiers in Iraq.

For the time being the conflict between westerners who align themselves with different or even opposing “universal” principles is purely conceptual and political and remains under control. But if the globalisation of rights expands further and the situation deteriorates, then it may also become violent. We may see Italians (and likewise Frenchmen, Germans and Americans) who, freed from the moral obligation of loyalty to their country and fellow countrymen, fight against each other in the name of a higher moral obligation towards “universal” principles, values and rights that transcend those of national loyalty.

By breaking down the principle of inviolability of national sovereignty, the West has laid the foundations for a transversal, global civil war.